

峠 の 腰 窯 跡 1

双葉北部地区 農道4号改良工事に伴う
江戸時代の発掘調査報告書

2024

山梨県中北農務事務所

甲斐市教育委員会



巻頭写真1 調査区遠景（南から・写真奥は八ヶ岳）



巻頭写真2 調査区完掘状況（矢印付近が竈本体）



巻頭写真3 調査区遠景（北から・調査区は矢印付近、樹木によって隠れている）



巻頭写真4 調査区遠景（北東から・中央の丘が調査区）

序 文

平成 16 年（2004）に中巨摩郡竜王町・同郡敷島町・北巨摩郡双葉町が合併して誕生した甲斐市は、令和 6 年（2024）9 月に市制施行 20 周年を迎えます。本市は合併後も人口が微増し続けており、そのため、宅地開発等によって生じる埋蔵文化財調査が毎年行われています。

現在、市内には 220 箇所の遺跡が周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されていますが、とくに市中央部の茅ヶ岳南麓や市東部の荒川扇状地に集中しています。この中には、居住域と墓域がセットで発見された弥生時代の「金の尾遺跡」や、山梨県最古の登窯跡である白鳳期の「天狗沢瓦窯跡」など、県の歴史を紐解く上でも重要な遺跡が点在しています。

今回報告します「峠の腰窯跡」の第 1 次発掘調査は、茅ヶ岳南麓に位置する甲斐市宇津谷の農道改良工事に伴い行われました。本遺跡が所在する場所は、昭和のある時期の農道建設によって大量の瓦破片が出土することが地元では知られていました。その後、1989 年 11 月に山梨県埋蔵文化財センターが実施した「山梨県生産遺跡分布調査」によって、江戸時代後期の窯跡であることが判明しています。今次調査では、窯本体の調査は事業対象外のため調査はいたしませんでしたが、3 層にわたる灰原を検出し、土層堆積状況から灰原にも時期差があることがわかりました。

近年、全国的にも文化財の次世代への継承が大きな課題となっており、地域社会総がかりで文化財を継承してゆく必要が指摘されています。そこで、本市は「甲斐市文化財保存活用地域計画」を作成し、令和 4 年 12 月に文化庁長官から認定を受けたところです。今後は本計画に基づき、埋蔵文化財調査をはじめとした種々の調査を実施し、調査成果を後世に伝えていくとともに、学校教育や歴史研究、生涯学習の資として多くの方々に幅広く活用していく所存です。

最後になりますが、ご指導、ご協力いただきました関係各位に感謝申し上げます。

令和 6 年 3 月

甲斐市教育委員会
教育長 高 鳥 悟

例 言

1. 本書は、山梨県甲斐市宇津谷 1314 に所在する峠の腰窓跡第 1 次発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は農道改良工事に伴い実施された。調査面積は約 120㎡である。
3. 発掘調査及び整理分析調査期間
試掘調査 令和 2 年 11 月 9 日～同年 12 月 11 日
発掘調査及び基礎整理分析調査 令和 4 年 7 月 4 日～令和 5 年 2 月 27 日
整理分析調査 令和 5 年 5 月 1 日～令和 6 年 3 月 31 日
4. 調査組織は次のとおりである。
調査主体者 甲斐市教育委員会
調査担当者 長谷川 哲也（甲斐市教育委員会）
調査事務局 甲斐市教育委員会 教育部 生涯学習文化課 文化財係
発掘・整理分析調査協力者（令和 2 年度・令和 4～5 年度、五十音順）
青木 保志・青柳 正史・秋山 高之助・飯沼 源治・大塚 律子・笠井 治・小林 求・齊藤 功記
佐野 進一・醍醐 三郎・高添 美智子・瀧口 晴彦・立花 重光・田中 ひとみ・祐津 利人・羽中田 勲
日向 充雄・古屋 秀雄・丸茂 梨果・村松 圭子・望月 典子・箭本 千尋
5. 報告書作成にあたり、以下の方々に御指導、御助言を賜った。厚く御礼申し上げる。（敬称略・順不同）
小林 正史（調査区 元地権者）・猪股 庄太郎（作業員駐車場地権者）
坂本 美夫・新津 健・鈴木 麻里子・菟原 桂・畑 大介・丸尾 依子（甲斐市文化財保護審議会委員）
末木 健（山梨県考古学協会）・宮里 学・網倉 邦生・岩永 祐貴（山梨県文化振興・文化財課）・望月 秀和・
櫻庭 睦史（山梨文化財研究所）・小林 健二・御山 亮済・熊谷 晋祐・桐部 夏帆（山梨県埋蔵文化財セ
ンター）・渋谷 賢太郎（並崎市教育委員会）・泉 英樹・高野 高潔（昭和測量株式会社）
6. 本書の執筆及び編集、遺構・遺物の写真撮影はすべて長谷川が行った。
7. 遺構測量と平面図作成、出土遺物の出土位置記録、U A V による空中写真撮影は疾測量株式会社（代表取締役：石井猛雄）に委託した。
8. 出土遺物（第 33 図・95・96）の接合・実測は、昭和測量株式会社（代表取締役：石原 圭）に委託した。
9. 峠の腰窓跡第 1 次発掘調査において得られたすべての資料は一括して甲斐市教育委員会に保管してある。
10. 調査の概要については、その他の出版物等で一部公表されているが、本書と異なる場合は本報告をもって訂正する。

凡 例

1. 座標は世界測地系に準拠した。また、標高は東京湾平均海水面水準である。
2. 遺構堆積土及び土器の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準拠している。
3. 本書に用いたスクリーンパターンは、次のとおりである。



4. 各挿図の縮尺は、遺構 1/40、土器 1/3、石製品 1/1 を原則とし、それぞれにスケールを付した。
5. 遺物の番号は、本文・挿図・観察表で統一し、調査区全体を通して 1 番から順に番号を付加した。
6. 出土遺物観察表の計測値欄中、（ ）内数値は推定を表し、残部の計測は数字の頭に「残」と記した。
7. 本書で使用した地図は、国土地理院地図及び陰影起伏図、甲斐市都市計画地図をそれぞれ一部加工して使用した。

本文目次

序文／例言・凡例／目次

第1章 調査の経過と概要	1
第2章 遺跡の環境と概要	2
第1節 地理的環境	2
第2節 周辺の歴史的環境	5
第3節 峠の腰塚跡の調査履歴	9
第3章 遺構と遺物	11
第1節 調査の方法	11
第2節 基本層序	11
第3節 遺構と遺物	17
第4章 まとめ	55

写真目次

写真1 人力による表土除去	1	写真6 図版編集	2
写真2 測量調査委託 実施状況	1	写真7 竹の炭化物（調査区南から出土）	60
写真3 測量調査委託 実施状況	1	写真8 同上	
写真4 土器の土落とし	2	写真9 窯体片（調査区南上層から出土）	60
写真5 分類	2	写真10 同上	

表目次

第1表 出土遺物観察表	52	第2表 出土口辺部 遺物観察表	57
-------------	----	-----------------	----

図版目次

第1図 甲斐市域図	3	第23図 南区上層／ 地表面～地表下50cm出土遺物	37
第2図 周辺地形図	4	第24図 南区下層／4号石組・1号落込出土遺物	38
第3図 峠の腰塚跡と周辺の遺跡	7	第25図 南区下層／1号落込出土遺物	39
第4図 調査区位置図	8	第26図 南区下層／ 1号及び2号落込出土遺物	40
第5図 試掘トレンチ位置図	10	第27図 南区下層／ 3号及び4号落込出土遺物	41
第6図 調査区壁 土層図	13・14	第28図 南区下層／4号落込 ・地表下50cm～110cm出土遺物	42
第7図 調査区全体図	15・16	第29図 南区下層／地表下50cm～110cm出土遺物	43
第8図 南区上層／石列検出	22	第30図 南区下層／地表下50cm～110cm出土遺物	44
第9図 南区上層／石列完掘	23	第31図 南区下層／地表下50cm～110cm出土遺物	45
第10図 南区上層／1号～3号石組	24	第32図 南区下層／地表下50cm～110cm出土遺物 北区／8号石組・5号及び6号落込 出土遺物	46
第11図 南区上層／1号土坑 ・南区下層／4号石組	25	第33図 北区／埋設土器出土遺物	47
第12図 南区／石列下層（土層堆積状況）	26	第34図 北区／埋設土器 ・地表面～地表下50cm出土遺物	48
第13図 南区下層／1号及び4号落込	27	第35図 北区／地表面～地表下50cm出土遺物	49
第14図 南区下層／2号及び3号落込	28	第36図 北区／地表面～地表下50cm出土遺物	50
第15図 北区／6号～8号石組	29	第37図 北区／地表面～地表下50cm出土遺物 工事立会い時地表面採集遺物	51
第16図 北区／5号及び6号落込	30	第38図 出土口辺部分類	56
第17図 北区／埋設土器	31	第39図 灰原の時期差想定図	59
第18図 南区上層／石列出土遺物	32		
第19図 南区上層／土器集中出土遺物	33		
第20図 南区上層／土器集中出土遺物 ・地表面採集遺物	34		
第21図 南区上層／地表面採集遺物 ・地表面～地表下50cm出土遺物	35		
第22図 南区上層／ 地表面～地表下50cm出土遺物	36		

写真図版目次

図版 1	試掘調査	試掘調査前風景（南から） 試掘調査前風景（北から） 土器露頭状況（東から） 土器露頭状況（南から） 試掘調査前風景（東から） 試掘調査 土器露頭状況（南から） 試掘調査風景（北から） 試掘調査風景（東から）	図版 10	調査区北	埋設土器 検出（西から） 埋設土器 出土状況（西から） 埋設土器 出土状況（南から） 埋設土器 完掘状況（西から） 埋設土器 出土状況（西から）
図版 2	試掘調査	窠本体 草刈り後状況（東から） 南北トレンチ② 窠本体推定部（東から） 南北トレンチ② 窠本体推定部（南から） 南北トレンチ⑩ 焚口推定部（東から） 南北トレンチ⑩ 焚口推定部（南東から）	図版 11	土層写真	調査区南 北壁（第6図中の①） 調査区南 東壁（第6図中の②） 調査区南 南壁（第6図中の③） 調査区南 北壁（第6図中の④） 調査区南 南壁（第6図中の⑦） 調査区南 西壁（第6図中の⑧） 調査区北 南西壁（第6図中の⑪⑫） 調査区北 西壁（第6図中の⑬）
図版 3	試掘調査	南北トレンチ調査風景（東から） 東西トレンチ①西端（県トレンチと一部重複） ビニール袋で養生された礫検出状況（東から） 南北トレンチ③調査風景（南から） 南北トレンチ③調査風景（北から） 南北トレンチ③土層堆積状況（南から） 南北トレンチ③土層堆積状況（南から） 南北トレンチ⑦～⑨掘削状況（北から） 南北トレンチ⑦土層堆積状況（北から）	図版 12	遺物番号 1～10 / 11～25	
図版 4		調査前風景（伐採後・南から） 調査前風景（伐採後・北から） 農道法面土器露頭状況（東から） ゴミ・落ち葉等除去後（南から） 人力による表土除去（北から） 人力による表土除去（東から） 表土中から出土する土器とゴミ 人力による表土除去（北から）	図版 13	遺物番号 26～38 / 39～49	
図版 5	調査区南 上層	石列 検出状況（1回目・東から） 石列 検出状況（1回目・北東から） 石列 検出状況（1回目・北から） 石列 検出状況（1回目・南東から） 石列 検出状況（1回目・真上から）	図版 14	遺物番号 50～56 / 57	
図版 6	調査区南 上層	石列 検出状況（2回目・東から） 石列 完掘（東から）	図版 15	遺物番号 58～66 / 67～76	
図版 7	調査区南 上層	1号石組 検出（北から） 1号石組 完掘（北から） 2号石組 検出（南から） 2号石組 完掘（南から） 3号石組 検出（南東から） 3号石組 完掘（東から） 1号土坑 検出（西から） 1号土坑 完掘（西から） 土器集中（灰原）検出（南東から）	図版 16	遺物番号 77～95, 97 / 98～110	
図版 8	調査区南 下層	4号石組 検出（西から） 4号石組 完掘（西から） 2号落込 完掘（北西から） 1号落込 完掘（南西から） 4号落込 完掘（北西から） 3号落込 完掘（北東から）	図版 17	遺物番号 96	
図版 9	調査区北	遺構検出状況（南から） 6号石組 検出状況（西から） 7号石組 検出状況（西から） 8号石組 検出状況（南から） 遺構完掘状況（北から）	図版 18	遺物番号 111～117 / ①～⑪	

第1章 調査の経過と概要

1. 調査に至る経緯

年度当初の令和2年4月3日、市農林振興課から文化財保護法第94条に基づく通知が当課に提出された。中山間地域総合整備事業として双葉北部地区農道4号の改良・拡幅工事を行う内容であり、恒久的構造物の建設が含まれていることから、同年4月8日に山梨県知事宛に試掘調査が望ましい意見書を添えて進達した。同時に市農林振興課には、「試掘調査は必須となり、改良予定地内には表土が露出し、容易に目視できる部分が多数ある」旨を口頭伝達した。山梨県から同年4月14日付・文化第142号によって試掘調査指示が通知され、市農林振興課に伝達した。その後、事業主体が山梨県中北農務事務所ということが判明したため、今後の連絡は市農林振興課を通さずに当課と山梨県中北農務事務所で行うこととなった。

試掘調査は同年11月9日から12月11日まで実施した。その結果、農道拡幅部分は灰原にあたり、多量の土器が包含されていることが判明したため、工事前に本調査が必要である旨を令和2年12月14日付・甲斐生第12-43号にて回答し、発掘調査は令和3年7月から11月、整理分析調査は令和4年度に実施する予定で協議を進めた。併せて令和3年3月17日付・中北農務事6572号によって山梨県中北農務事務所長から埋蔵文化財の発掘調査依頼が提出されたため、甲斐市教育委員会で調査を実施する運びとなった。

しかし、令和3年度に入り調査着手の準備を進めている段階で、山梨県中北農務事務所から諸般の事情により当初の予定で農道改良工事を実施することが困難となったため、調査着手を待つよう伝えられた。その後、令和3年12月20日付・中北農務事4891号によって正式に調査期間の変更依頼が提出されたため、発掘調査及び整理分析調査はそれぞれ1年延期することとなったため、令和4年度及び5年度に調査を実施した。

2. 発掘調査の経過

発掘調査は令和4年7月4日から11月18日まで行った。調査対象区域は農道改良工事によって農道が拡幅される約120㎡が対象である。試掘調査の結果、地表面にも多量の土器が存在し、かつ表土直下は樹根などが土器を抱き込んでいたことから重機による表土除去は不可能と判断した。そのため、人力掘削で表土を除去し、土器を回収しつつ掘り下げて行った。同時に、次年度の整理・分析調査に供えて発掘調査中及び調査終了後に、出土遺物に付着する土を竹筥及び竹串を用いてある程度そぎ落とした。調査終了後は、再び人力によって埋め戻しを行い、調査を終了した。

3. 整理・分析調査の経過

発掘調査報告書刊行に向けた整理・分析調査は令和5年5月24日から令和6年3月31日まで、主に敷島文化財整理室で行った。前年度にある程度分類した遺物及び、口辺部などの器種同定が容易な遺物に注記を施したのち、報告書掲載遺物の実測をおこなった。その後、遺物のデジタルトレース、現場図面のデジタルトレース、掲載遺物の写真撮影など一連の作業を終え、令和6年3月末に報告書の刊行となった。



写真1 人力による表土除去



写真2 測量調査委託 実施状況



写真3 測量調査委託 実施状況



写真4 土器の土落とし



写真5 分類



写真6 図版編集

第2章 遺跡の環境と概要

第1節 地理的環境

1. 地理的位置と環境

本市は甲府盆地の北西側に位置し、東側は甲府市と昭和町、西側は韮崎市と南アルプス市、北西側は北杜市と接している。平成16年9月1日に中巨摩郡竜王町・同郡敷島町・北巨摩郡双葉町の3町が合併して甲斐市となり、現在の市域を構築している。面積は71.94km²、人口は令和5年11月末現在およそ7万6千人である。市域は山岳地・丘陵地・平地の3つのエリアに分類することができる。市の北部にあたる山岳地は、茅ヶ岳(1704m)や曲岳(1642m)、太刀岡山(1259m)、黒富士(1633m)など、標高千数百mを超える山々が点在する。地質は主に凝灰岩や凝灰角礫岩で構成されており、南流する亀沢川によって急峻な段丘崖を構築している。また、荒川の上流である国特別名勝御岳昇仙峡付近は花崗岩で構成されており、山を隔てて大きく地質が異なる。

市の中央部の一部は、主に火山活動によって形成された丘陵地が広がる茅ヶ岳南麓で、今回報告する峠の腰窯跡はこのエリアに立地している。本市教育委員会が行う遺跡調査において「地山」と認識している土壌は、火山活動によって堆積した、褐色で粘性が非常に強く、鉄分を含有する土壌である。この土壌は水分を含むと粘性が非常に強くなり、乾くと非常に硬くしめる特色がある。また、武田信玄が行ったとされる信玄堤に代表される治水施策では、分流した御勅使川の流水をぶつけた高岩もこのエリアに含まれる。

平地は市中央部の東と西、市南部に広がる。市の中央部東側は奥秩父山系の金峰山を源とする荒川によってつくられた荒川扇状地で、かつて大部分は水田として利用されていたが、現在はほとんどが宅地となっている。このエリアは甲斐市域のほか、甲府市千塚や山宮なども含まれ、扇状地上には旧河道の痕跡が浅い谷状に残っており、古い集落は微高地上に立地している。

市の中央部西側は塩川及び釜無川(富士川)の氾濫原で、現在は田畑と住宅地などが混在している。古い集落は丘陵の裾や谷部に立地しており、塩川及び釜無川に近接する平地に古い集落はみられない。

市の南部は、南アルプス鋸岳を源流とする釜無川(富士川)によって形成された釜無川扇状地で、北西から南東にかけてゆるやかに傾斜する。竜王信玄堤や竜王河原宿が立地するのもこのエリアである。現在、域内は開発等によって一見平坦に見えるが、国土地理院の「治水地形分類図」や米軍撮影の空中写真を確認すると、旧河道が幾筋も確認できる。そのため、地質の主は砂礫層である。また、江戸時代の村に該当する古い集落は微高地上に点在している。

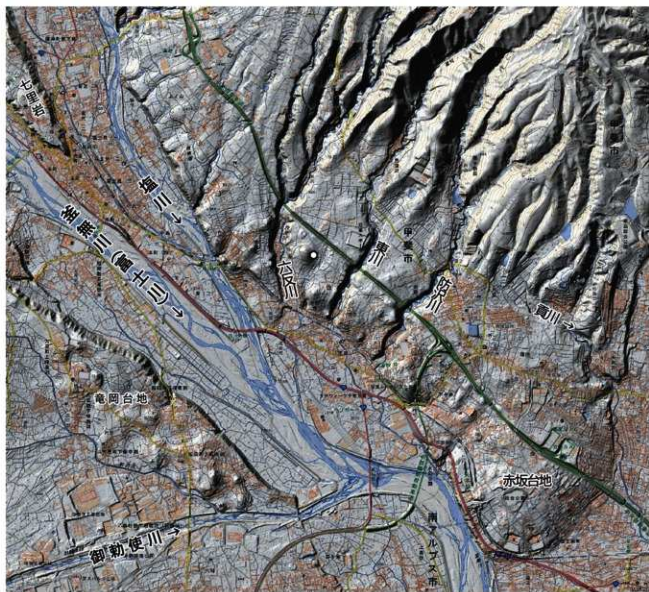


第1図 甲斐市域図
(甲斐市文化財保存活用地域計画 第4図を転載)

2. 地質・地形の様相

峠の腰窯跡が立地する丘陵地は、先にも述べたとおり主に火山活動由来の地質である。その詳細を『双葉町誌』(昭和52年)を参考に紐解くと、①黒富士火山火砕流(第1期～第5期・数十万年前)、②八ヶ岳の菲崎火砕流(約15～8万年前)、③菲崎火砕流を不整合に覆う黒色スコリア混じりの古期ローム層、④角礫や亜角礫のくさり礫の高位段丘(下末吉期に該当・約12.5万年前)、⑤亜円礫や円礫の中段段丘(武蔵野期に該当・約7～5万年前)、⑥円礫からなる低位段丘(立川期に該当・約1.9～1.3万年前)、⑦上記段丘面を被覆するローム層に分類できる。本遺跡の地質をおおまかに述べると、基底部に黒富士火山火砕流噴出物、その上に八ヶ岳火砕流(火山屑岩流)、さらに上に旧釜無川の河床砂礫層、最上部がローム層で構成されている。また、遺跡調査において地山と認識している地質は、⑦段丘面を被覆するローム層であり、遺構・遺物が確認される場合は本層からの検出・出土となるのが基本である。

本遺跡周辺の地形は黒富士火山などの火山性山地の裾野にあたり、南向き緩斜面の丘陵地で調査区の標高は382mである。この丘陵地は標高400m付近の極無^{たてなしせき}腹(かんがい水路)から標高320m付近のJR中央本線以北を示し、大字志田と宇津谷、JR塩崎駅前の一部地域を除いた部分にあたる。丘陵地上には②八ヶ岳の菲崎火砕流によってつくられた小円頂丘群(流れ山)が不規則に分布し、中でも「宇津峰(天王山)」又は「丸



第2図 周辺地形図
(地理院地図 陰影起伏図(透過率10%・合成)を使用・白抜きドットが調査区)

山」と地元で呼称されている調査区付近の丘は最も典型的な円頂丘で、直径約 100 m・高さ約 20 mをはかる。規模も大きな円頂丘で、お椀を伏せたような形と形容するのがふさわしい様相から「古墳(円墳)ですか」との質問を受けることが稀にある。

ほかに、藤塚と呼ばれる標高 375.3 mの三角点のある円頂丘、八倉山と呼ばれる円頂丘、八幡諏訪神社(宇津谷字滝沢)の円頂丘など規模の大小はあれども丘陵地上には多数の円頂丘をみることができる。また、蒲崎市と北杜市にまたがる七里岩(国登録記念物)や八ヶ岳南麓にも多くの円頂丘が存在し、共に国指定史跡の新府城跡(蒲崎市)と谷戸城跡(北杜市)も円頂丘を利用して造られている。

調査区周辺の河川は一級河川富士川水系の本流である釜無川(富士川)、支流の堀川うくみんがわのほか、六反川むくろがわ、東川、防沢川の小河川が南流し、深い谷を形成して丘陵地を分断している。基底部の黒富士火山火砕流噴出物は未固結の白色凝灰岩や凝灰角礫岩で、通水性及び保水性が比較的良好といわれているが、最上部に不透水性のローム層が被覆するため、降雨量が多い時期は雨水が一気に流れ下る。また、丘陵地では水の確保に苦勞し、江戸時代前期に開削されたといわれる榎無堰をはじめ、溜池によって用水確保を行っている。

第2節 周辺の歴史的環境

本遺跡が立地する丘陵地で行われた発掘調査履歴を中心に、周辺の歴史的環境を時代ごとに述べる。なお、遺跡名の後ろの()は、遺跡が主に所在する市内大字及び自治体名である。

旧石器時代

山梨県埋蔵文化財センターが 1992 年度から 1993 年度にかけて行った唐松遺跡(宇津谷)の発掘調査では、当該期と思われる黒曜石製のナイフ形石器が 1 点出土しているほか、旧竜王町が実施した赤坂ソフトパーク建設予定地(竜王新町)の試掘調査においても、当該期の黒曜石製の縦長剥片が出土している。

縄文時代

唐松遺跡では中期初頭から後葉にかけての竪穴建物跡が 9 軒と土坑 100 基、東峰 C 遺跡(団子新居)では中期後葉の竪穴建物跡を 6 軒確認している。宇津棟 A 遺跡(宇津谷)では、中期後半の竪穴建物跡 1 軒と土坑 1 基を確認するのみだが、住民によれば、子供の頃は遺跡周辺で黒曜石片や黒曜石製の鏃が多量に拾えたため、雨上がりに父親と何度か拾いに来たという。このことから、未調査区域に集落遺跡が存在している可能性もある。

弥生時代

発掘調査では弥生時代の遺構・遺物は確認されていない。詳細は不明なものの、双葉歴史民俗資料館に宇津谷字駒沢付近で採集された弥生土器と伝わる展示物がある。なお、荒川扇状地には県下でも著名な弥生時代後期の遺跡である金の尾遺跡(大下条)が立地する。

古墳時代

丘陵地上には 7 世紀前後に属する赤坂台古墳群(竜王新町)が存在する。古墳群はいくつかの支群を形成し、かつては数十基が存在したようであるが、現在では中稜塚古墳や孤塚 1 号墳など数基が残るのみである。なお、中央自動車道建設の際に発掘調査され、7 世紀中葉とされる竜王 2 号墳の石室内からは毛彫り馬具が出土している。古墳群から西へ 2 キロほど離れたショッピングセンター駐車場内に、7 世紀前後に造られたお舟石古墳(志田)が存在する。この古墳は丘陵地ではなく氾濫原の微高地に単独で位置している特徴があり、周溝底部から 3 頭分の馬歯が出土し、儀礼との関係が指摘されている。なお、丘陵地では古墳時代の集落遺跡は発見されていないものの、市子石遺跡(下今井)では古墳時代前期に属する土器片が出土している。

古代

7 世紀後半(白鳳期)の登窯跡が 3 基発見された天狗沢瓦窯跡(天狗沢)が丘陵地東端に立地する。瓦の

供給先は発見されていないものの、付近に古代寺院や役所（巨摩郡衙）の遺構が存在する可能性が高いと推測されている。出土した鍔瓦（軒丸瓦）は素縁素弁八葉蓮華文と有段縁素弁八葉蓮華文の2種類の瓦当文様をもち、その祖型を衣川廃寺（大津市）や杉崎廃寺（飛騨市）、明科廃寺（安曇野市）に求める見解がある。ほか、お舟石古墳に近接する間々下遺跡で10世紀代の竪穴建物跡が4軒確認されているが、古代に関する調査事例は以上である。なお、本市宇津谷に隣接する韮崎市穂坂町付近は甲斐国の古代御牧の1つである穂坂牧の推定地となっており、^{ほさかのまき} 韮崎市との境界に位置する宇津谷付近の丘陵地も穂坂牧の範囲に該当すると思われるが、牧に関連する考古資料は出土していない。

中世

成立時期が中世にさかのぼるとされる穂坂路、逸見路が台地上を通っているが、中世に関する調査履歴は少ない。間々下遺跡（下今井）では中世の遺構は検出していないものの、土砂の流れ込みによって形成された遺物包含層から、縄文時代から室町時代頃までの遺物が出土している。間々下遺跡の北側（上流部）に、古代末から中世の集落が存在したと推測されている。

志田・宇津谷では、14世紀から鋳物師集団が活躍していたことが、現在も残る梵鐘などから一部明らかになっている。向嶽寺（甲州市）の銅鐘や諏訪上社神社宮寺（長野県諏訪市）の五重塔露盤の銘などから志田鋳物師と宇津谷鋳物師の2系統が知られており、また、妙福寺（中巨摩郡昭和町）鰐口には、天文四年（1535）と「天狗沢大工」という銘があることから、志田・宇津谷の鋳物師が天狗沢に移ったともいわれている。しかし、鋳物師の16世紀初頭以降の活動は不明であることに加え、史資料が乏しく実態は依然不明のままである。

J R 塩崎駅に位置する塔ノ越経塚（下今井）では、永禄4年（1561）銘の経筒が出土している。円筒形・六角形経塚が同一経塚から発見された数少ない例で、埋納には摂津国と肥前国の六十六部聖が関与していることが、銘文から判明している。現在、経筒は県指定文化財となっている。

近世

本書にて報告する峠の腰窯跡と同時期に操業していたと考えられている諏訪大神社窯跡（宇津谷）が、丘陵地の裾部に立地している。神社拝殿東側に保存されている登り窯では、ほぼ垂直に立ち上がる窯壁に甕の口辺部をレンガ状に積み重ねて築いていることが特徴で、この甕は峠の腰窯跡で生産された甕の破片を利用している。主に釉薬のかけられた碗類を生産していたこの窯跡は、峠の腰窯跡で生産された甕の破片を窯壁に用いていることから、窯が築造された順番を推測することができる。

包蔵地ではないものの、本遺跡の北側にあたる宇津谷字笠石の個人所有の畑から埋設された甕の破片が出土し、山梨県埋蔵文化財センターが部分的に調査を行っている。胎土や形状の特徴が峠の腰窯跡出土遺物と類似することから、峠の腰窯跡で生産された甕と位置付けられている。

六反川沿いの宇津谷・妙善寺前に、延享3年（1746）から7年間一橋家の陣屋が置かれたという。現在も一橋陣屋跡（宇津谷）として周知の埋蔵文化財包蔵地のほか市史跡に指定されているが、発掘調査履歴がなく実態は不明である。

そのほか、丘陵地東縁に立地する大字境の神明神社付近では、甲府城修理のための瓦を生産したという古文書が残っているほか、江戸時代後期の地誌『甲斐国志』には「龍地で土鍋を作っていた」との記述がある。

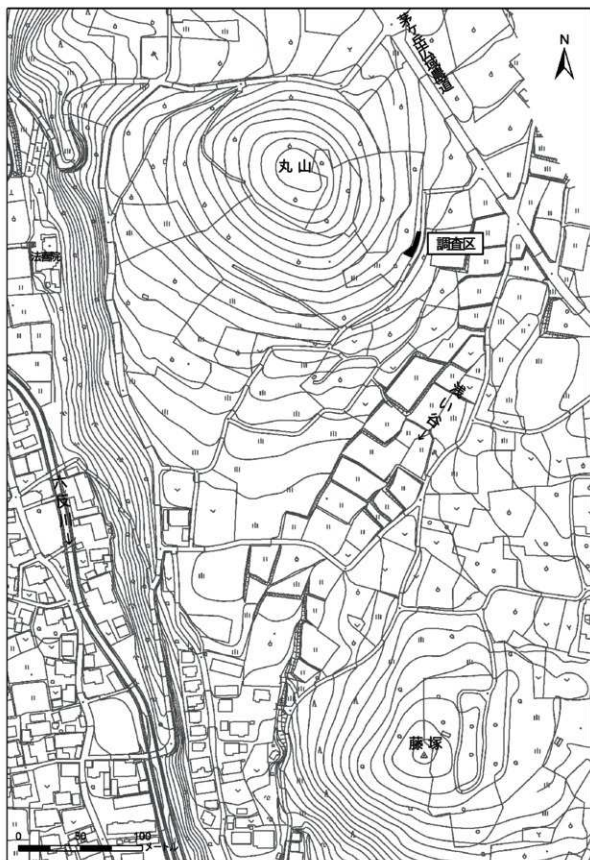
近現代

前述の『甲斐国志』中の記述にある土鍋生産と関連があるのか不明だが、明治時代から平成初め頃まで、龍地・下今井では瓦生産を行っていた。茅ヶ岳山麓の粘土を使って生産していたようだが、粘土採取地などは不明である。

以上、発掘調査履歴は多いとはいえないものの、古代から近現代にかけての生産遺跡が市域の中でも多く存在していることが本遺跡周辺の特徴といえる。



第3図 峠の腰跡と周辺の道跡



第4図 調査区位置図

第3節 峠の腰窯跡の調査履歴

山梨県埋蔵文化財センターによる調査

本遺跡は、昭和のある時期に今次調査区の東側を通る農道建設によって、大量の甕破片が出土することが地元では知られていたものの、年代や構造については不明のままであった。考古学的調査の嚆矢は、平成元年（1989）11月に山梨県埋蔵文化財センターが実施した「生産遺跡（窯業遺跡）分布調査」に伴う確認調査である。この調査によって、登り窯1基を検出し、灰原は窯の両側と南側にあることが判明した。窯の規模は幅約1.2m、高さ1m以上、藪のため正確な規模は測量できていないものの、長さは現存する部分で12m以上あると考えられている。出土遺物は、口径30cm前後の甕の破片や、搗鉢、ほうろく、土製品が出土しているが、主な遺物は甕の破片である。詳細は『山梨県生産遺跡分調査報告書（窯業遺跡）』（山梨県埋蔵文化財センター調査報告第51集）を参照のこと。

令和2年度の試掘調査

その後、本遺跡の発掘調査は令和2年度に実施した試掘調査まで行われていない。試掘調査では、農道拡幅によって削られる部分に幅1m未満の小規模なトレンチをいくつか設定し、遺構・遺物の確認を行った。その結果、拡幅予定地に窯本体は存在せず、かつ灰原も南から北にかけて徐々に出土遺物が少なくなることが判明した。また、農道の線形が今後変更となる可能性も考慮し、平成元年に県が行った調査のトレンチ位置（県トレンチ＝南北トレンチ①）を確認するとともに、窯本体がどの範囲まで及んでいるか、さらに小規模なトレンチを複数設定して調査を行った。県トレンチではビニール袋で養生された石列を一部検出し、県トレンチ南側に設定した南北トレンチ②では、被熱し硬化した窯壁の両端部分と思われる部分を確認し、その東側に設定した南北トレンチ⑦では、焚口と思われる石組を持つ遺構を検出した。これらは、おおむね県が調査をした際に検出した窯壁部分の延長線上にあたることが判明したため同一の遺構ととらえ、窯本体のおおまかな位置が判明した（本体の推定位置は第5図を参照）。

なお、窯本体部分の遺構保護のため、検出面以下の掘削は行わずに埋め戻しを行い、焚口が想定される南北トレンチ⑦は、山砂を全面に敷いた上で本トレンチから出土した遺物とともに埋め戻した。

窯跡の年代

窯跡の年代は『甲斐国志』（文化14年・1814成立）と、本遺跡西側の宇津谷集落に所在する天香山 妙善寺所蔵文書（以下、妙善寺文書）によるところが大きい。『甲斐国志』巻百二十三付録第五には、「甕 北山筋ノ宇津谷村武川筋ノ下条南割ニテ造ルハ水甕ニ用イル」と記載があり、本遺跡を指すと考えられている。また、妙善寺文書の年貢割付帳（寅御年貢可納割附之事・文政元年（1818）／午御年貢可納割附之事・文政5年（1822））に、「甕焼運上」の記述があることから、本遺跡で生産した甕を税として納めていたと考えられている。

なお、文政元年の文書中には「一、永百五拾一文 申方寅迄七ヶ年季 甕焼運上」とあり、申年（文化9年・1812）から寅年（文政元年・1818）まで7年間甕を焼いて税を納めていたことが判明している。同様に、文政5年の文書中には「一、永二百五拾八文 卯方西迄七ヶ年季 甕焼運上」とあることから、卯年（文化2年・1819）から酉年（文政8年・1825）まで7年間甕を焼いて税を納める記述があることから、文化9年（1812）から文政8年（1825）までの14年間は甕を生産していたことが確認されている。

以上のことから、『山梨県生産遺跡分調査報告書（窯業遺跡）』では、本遺跡は『甲斐国志』の記述及び成立時期と、妙善寺文書の年貢割付帳にある前述の記述内容から江戸時代後期の窯跡としている。そのため、本報告も江戸時代後期の窯跡として報告を行う。

第3章 遺構と遺物

第1節 調査の方法

試掘調査の結果、掘削深度が深いところでは1 m以上となることが判明していたため、安全管理上現況農道に接する部分の掘削は行っていない。また表土除去から人力による掘削を実施したため、人力で伐根が不可能なサイズの樹根は除去せず、樹根周辺も掘削は行っていないことを最初に断っておく。

調査前、調査区は現況農道よりも100 cm程度高くなった平坦地であった。現況農道の断面に遺物が散見できることから、操業によって地表面が周辺よりも高くなっていったことがうかがえたので、操業当時の地表面を検出することを目的に、徐々に掘り下げていった。また、調査区は南北に細長く、かつ廃土置き場のスペースも狭隘であったことから、南区と北区に分けて反転調査をすることを念頭に掘削をはじめた。まず、大量の遺物出土量が予想される南区から調査に着手したところ、廃土置き場に若干の余裕があることが判明したため、反転調査は行わずに北区の調査にも着手した。

灰原という遺構の性格上多量の遺物が出土するため、次年度の整理分析調査に備えて現場で遺物の分類をある程度行った。甕の口辺部・胴部・底部の大小破片ごと大まかに分類したのち、日付や出土位置ごとに仕分けて土のう袋に収納した。併せて、現場の土壌は粘性が強い上に乾燥すると強固にしまるため、出土遺物に付着する土を、竹箆及び竹串を用いてある程度そぎ落とした。その際に施文などがある特徴のある土器片や、甕とは異なる器種だと判断した土器片は別途分類し、遺物管理用のビニール袋に番号を付けて収納した。ビニール袋に収納した遺物は全99袋である。遺物は敷島文化財整理室に運搬し、土のう袋に管理番号をふった上で一覧表を作成して管理を行った。現場作業終了後に基礎整理作業を実施し、水洗できる遺物については水洗を行った。なお、出土遺物量は土のう袋172袋分で、コンテナには収まらず保管場所もスペースが限られているため、土のう袋のまま保管している。

整理分析調査においては、前年の基礎整理作業で選別した遺物の中から報告書掲載遺物を選択し、注記・接合・実測を行った。実測図のトレースは「Adobe Photoshop CC」、「Adobe Illustrator CC」にてデジタルトレースし、拓本の挿図編集・版組も同ソフトを用いて行った。それと並行し、発掘調査現場での情報をもとに遺構の図面や出土遺物の検討を行い、齟齬がないよう留意し本報告を記述した。

なお、現場写真及び遺物写真の撮影はデジタル一眼レフカメラ（Nikon D 5300）を使用した。

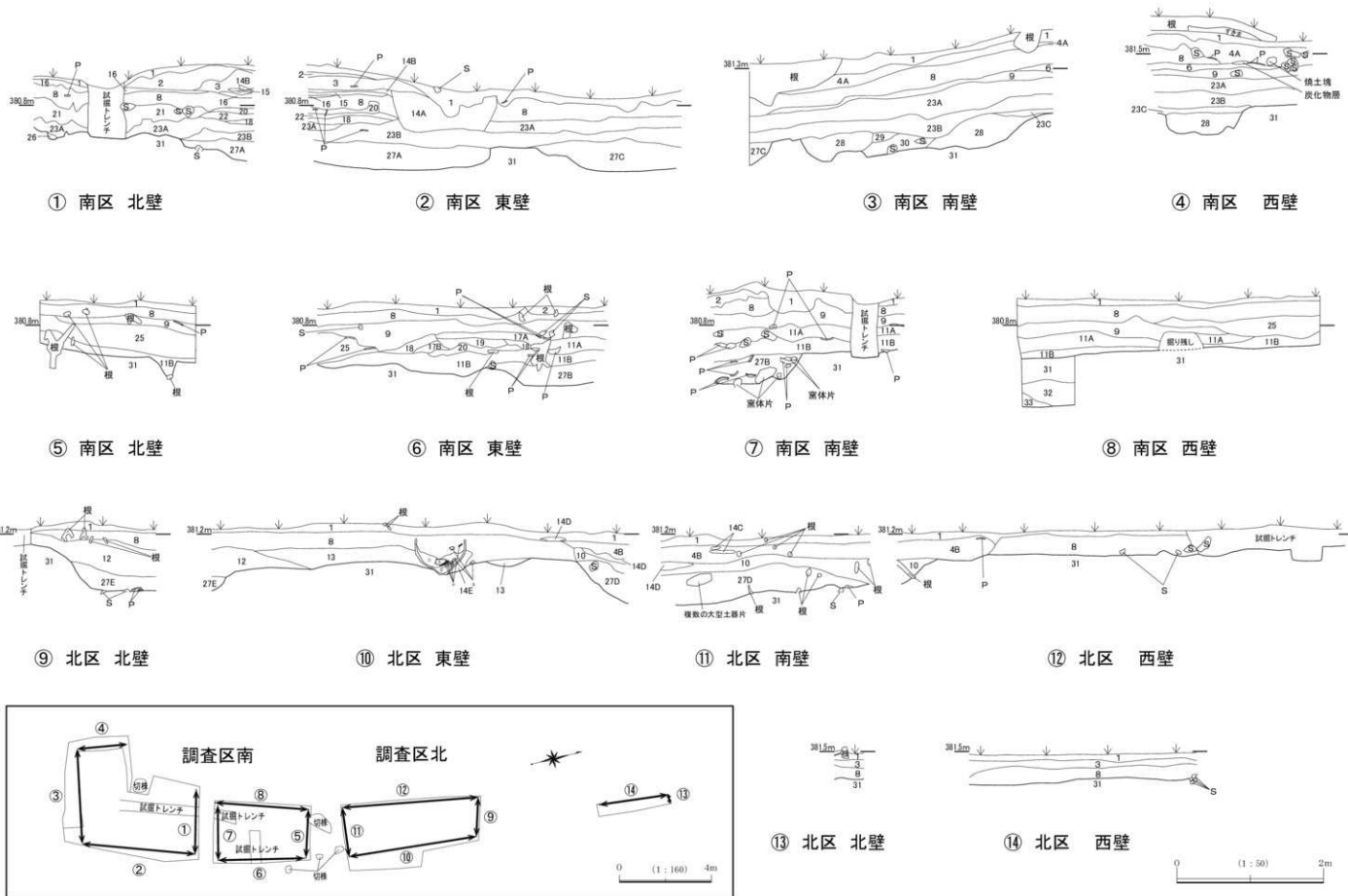
第2節 基本層序

層序については第6図 調査区壁 土層図を参照。遺物の包含量に差はあるが1層から30層にわたって遺物が出土する。調査区全域において硬くしまった31層（暗褐色土）に到達すると遺物が出土しなくなることから、31層を操業当時の地山と認識した。また、31層以下を部分的に深掘したところ、遺跡調査において茅ヶ岳南麓の地山と認識している安山岩質の小礫を含むローム質の褐色土である33層を検出した。調査区は西から東に傾斜する流れ山の裾部にあたることから、33層の上に32層及び31層が自然堆積したと考えられる。

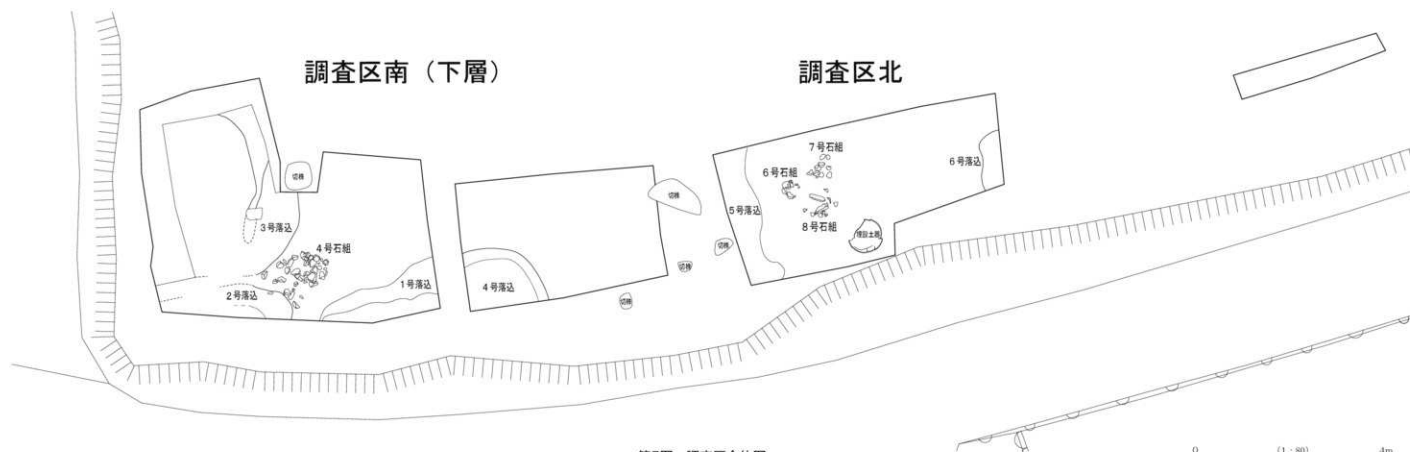
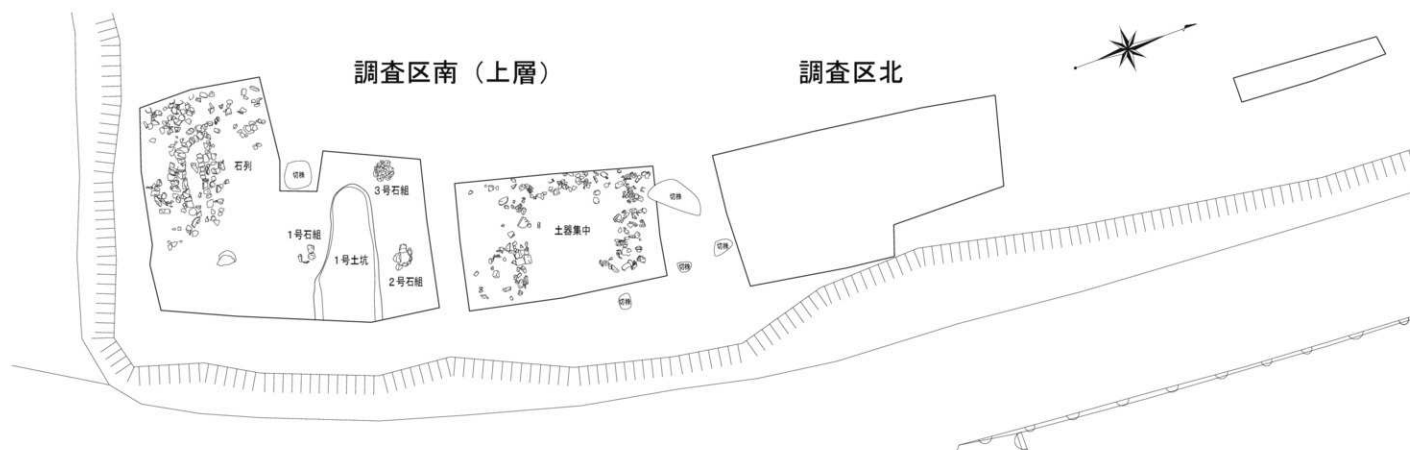
操業当時の地山である31層は、調査区の南北によって検出深度が異なる。調査区北では地表下40 cm前後で検出となるが、調査区南「⑧ 南区 西壁」では地表下80 cm前後で検出、「④ 調査区 西壁」では地表下100 cm前後で検出する。このことから、調査区は西から東へ傾斜する以外に、北から南にかけて浅い谷地形を呈していることが判明した。そのため、調査区北は調査区南に比べて土層の検出数が少ない。

第6図調査区壁 土層説明

- 1、表土 腐体片と土器片を含み、現代のゴミ混じり 笹の根
- 2、褐色(7.5YR4/4) 粘性あり しまり強い 3～5cm大の焼土塊を含む
- 3、褐色(7.5YR4/3) 粘性あり しまり強い 1～3cm大の焼土塊を少量含む
- 4A、暗褐色(10YR3/3) 粘性あり しまりあり 腐体片
- 4B、暗褐色(10YR3/3) 粘性あり しまりあり 土器片を多量に含み、3cm大の焼土塊を含む
- 5、赤褐色(5YR3/2) 粘性ややあり しまり強い 土器片と礫を含む 焼土層
- 6、褐色(7.5YR4/3) 粘性ややあり しまり強い 火床面
- 7、褐色(7.5YR4/3) 粘性あり しまり強い 5cm大の焼土塊を含み、1cm大の腐体片を含む
- 8、暗赤褐色(5YR3/6) 粘性あり しまり強い 1～3cm大の焼土塊を含み、5mm大の焼土粒を多量に含む 土器・角礫を含む
- 9、焼土塊・土器・腐体片層
- 10、黒褐色(7.5YR3/2) 粘性あり しまり強い 1～3cm大の焼土塊を多量に含み、5mm大の炭化物を少量含む
- 11A、黒褐色(7.5YR3/2) 粘性あり しまり強い 5cm大の焼土塊を含み、1cm大の炭化物を含む
- 11B、黒褐色(7.5YR2/2) 粘性あり しまり強い 1～3cm大の焼土粒を含み、1cm大の炭化物を含む
- 12、褐色(7.5YR4/4) 粘性強い しまり強い 黒褐色土(7.5YR3/2)を含み、1～3cm大の安山岩質の小礫を多量に含む
- 13、土器片、5～10cm大の焼土塊、10cm大の礫を含む 黒褐色土(7.5YR3/2)を包含する
- 14A、粘土層 黄褐色(10YR5/6) 粘性強い しまり強い 1号土坑覆土
- 14B、同上 1号土坑の覆土ではない粘土
- 14C、粘土層 にぶい黄褐色(10YR6/4) 粘性非常に強い しまりあり
- 14D、粘土層 にぶい黄褐色(10YR5/3) 粘性非常に強い しまりあり
- 14E、粘土層 明褐色(10R5/6) 粘性非常に強い しまり強い 褐灰色(10YR4/1)の粘土を少量含む
- 15、にぶい赤褐色(5YR4/4) 粘性あり しまり強い 焼土層
- 16、黒褐色(7.5YR3/2) 粘性あり しまりあり 炭化物を含む
- 17A、にぶい黄褐色(10YR4/3) 粘性なし しまりあり 1mm大の極粗粒砂、1/2～1/4mmの中粒砂を含む砂層
- 17B、にぶい黄褐色(10YR4/3) 粘性なし しまりあり 1/2～1/4mmの中粒砂を含む砂層
- 18、褐色(10YR4/6) 粘性強い しまり強い 粘土
- 19、極暗褐色(5YR2/4) 粘性あり しまり強い 1cm大の焼土塊を多量に含む
- 20、黄褐色(10YR5/6)とにぶい黄褐色(10YR5/3)が混じる層 粘性強い しまり強い 粘土
- 21、円礫・角礫・焼土塊・土器層
- 22、にぶい黄褐色(10YR4/3) 粘性強い しまり強い 1cm大の炭化物を含む
- 23A、暗赤褐色(5YR3/2) 粘性強い しまり強い 1cm大の焼土塊を多量に含み、5mm大の炭化物を含む
- 23B、暗赤褐色(5YR3/2) 粘性強い しまり強い 1cm大の焼土塊を含み、5mm大の炭化物を含む
- 23C、暗赤褐色(5YR3/2) 粘性ややあり しまり強い 5mm大の焼土粒を多量に含む
- 24、黒褐色(10YR3/2) 粘性あり しまりあり 1cm大の焼土塊と炭化物を含む
- 25、暗赤褐色土(5YR3/3)を含む土器層 1～3cm大の焼土塊を多量に含み、5cm大の焼土塊、5mm大の炭化物を少量含む
- 26、暗褐色(10YR3/4) 粘性あり しまり非常に強い 1mm大の白色粒子を含む
- 27A、黒褐色土(7.5YR2/2)を含む土器層 土器は硬質が主 1号落込覆土
- 27B、黒褐色土(7.5YR2/2)を含む土器層 3cm大の焼土塊を含む 4号落込覆土
- 27C、黒褐色土(7.5YR2/2) 粘性あり しまりあり 5cm大の焼土塊を含む 27A層(1号落込覆土)に比べ土器の包含量は少ない 2号落込覆土
- 27D、土器片と焼土塊が多量に混じる層 極暗褐色(7.5YR2/3) 粘性あり しまりあり 5号落込覆土
- 27E、多量の土器片を含む層 暗褐色土(7.5YR3/4)を包含する 6号落込覆土
- 28、10～20cm大の腐体片と土器片、5～10cm大の焼土塊、3cm大の炭化物を含む層 3号落込覆土
- 29、黒褐色(7.5YR3/2) 粘性あり しまりあり 1cm大の炭化物、焼土塊を含む 3号落込覆土
- 30、黒褐色(7.5YR3/2) 粘性あり しまりあり
20cm大の被熱した角礫、5cm大の焼土塊、1cm大の炭化物、焼土粒を多量に含む 3号落込覆土
- 31、暗褐色(7.5YR3/4) 粘性あり しまり非常に強い 1mm大の焼土粒を含み、1mm大の炭化物を少量含む
- 32、褐色(7.5YR4/4) 粘性強い しまり非常に強い 1mm大の炭化物、安山岩質の5cm大の小礫を少量含む
- 33、褐色(7.5YR4/6) 粘性強い しまり非常に強い 1mm大の炭化物、安山岩質の3cm大の小礫を少量含む



第6図 調査区壁土層図



第7図 調査区全体図

第3節 遺構と遺物

調査区はどの層位からも遺物の出土は認められたものの、集中して出土する層位とそうでない層位が存在した。調査区南は最大掘削深度が約120cmであることから、遺構と遺物の検出・出土層位（深度）によって上層と下層に分類して報告する。上層とは表土から地表下50cm程度の深さまで、下層とは地表下50cm以下の層位を示す。ただし、調査区北は地表下50cm程度で操業当時の地山である31層（暗褐色土）を検出したので、上層・下層の分類は行っていない。

検出された遺構は以下のとおりである。

調査区南 上層）石列、1号～3号石組、1号土坑

調査区北）6号～8号石組

調査区南 下層）4号石組、1号～4号落込

5号～6号落込、埋設土器

主たる出土遺物は甕の破片である。本報告で図化した遺物は、器種の同定や推定が比較的容易な甕などの口辺部及び底部、土器に施文があるもの、甕以外の土器片を中心に図化した。したがって、出土遺物の大半を占める甕の胴部破片はほとんど図化していない。また、遺構に伴う遺物については出来る限り掲載をするよう努めたが、掲載できる遺物がない遺構もあることを断っておく。

なお、遺構図中の土層番号及び土層説明は、第6図と連動している。ただし、遺構の土層番号で○数字のものは、当該遺構の土層番号となる。

1. 調査区南 上層

石列（遺構：第8図～第9図／遺物：第18図 - 1～4）

形状・規模 調査区南の南端部分、窯本体と思われる小丘直下に位置する。明確な遺構範囲は特定できないが、石列検出範囲は東西2.2m前後、南北1.3m前後である。

出土遺物 それぞれ出土深度が若干異なる。1～4は石列検出までの上層から出土した。また、石列検出面までの深さで土のう袋25袋分の甕破片（主に胴部）が出土した。

調査所見 笹の根、ゴミ、土器片を含む表土を除去しつつ丁寧に掘削していたところ、角礫がいくつか並んでいる部分を確認し、周辺を掘り下げたところ石列を検出した。EPBラインの石列は、西に向かうにつれて北側へ弧を描くようにも見えるが、途切れてしまっている。また、EPCラインには土器片を並べたと思われる列がみられるが、どちらも遺構の性格は判然としない。ただし、石列を構成する角礫や、角礫周辺の土に被熱痕跡が見られることから、火を用いた何らかの施設であることは間違いない。石列除去後、焼土範囲が石列部分よりもやや広く検出されたため、何らかの火を用いていたと考えられる。

1号石組（遺構：第10図）

形状・規模 調査区南の1号土坑の南隣。検出規模は長軸短軸ともに40cm程度、石組除去後の深度は14cm程度である。

出土遺物 出土遺物がないため、図化遺物なし。

調査所見 西側部分のみ礫を検出していない。2号石組、3号石組と共に柱穴を想定していたが、アタリもなく、本遺構の性格は不明と言わざるをえない。

2号石組（遺構：第10図）

形状・規模 調査区南の1号土坑の北隣。検出規模は長軸短軸ともに45cm程度、石組除去後の深度は8cm程度である。

出土遺物 出土遺物がないため、図化遺物なし。

調査所見 石組を用いた柱穴状の遺構を想定していたが、石組を除去しても柱穴とはならず、石組と表現するよりも石囲いと表現したほうがよいかもしれない。1号石組同様、本遺構の性格は不明である。

3号石組（遺構：第10図）

形状・規模 調査区南の1号土坑の北西隣。検出規模は長軸短軸ともに45cm程度、石組除去後の深度は30cm程度である。

出土遺物 数点の甕口縁部破片が出土したが、図示できる遺物ではなかったため図示していない。

調査所見 他の石組に比べ完掘時の深度が深く土坑の可能性も考えられるが、遺構の性格は不明である。

1号土坑（遺構：第11図）

形状・規模 検出規模は東西約2.9m、南北約1.4m～0.9m、最大深度は54cmである。遺構は調査区外の東側へ伸長し、検出状況は舌状を呈する。

出土遺物 出土遺物がないため、図化遺物なし。

調査所見 セクション図は調査区東壁のもの。覆土はすべて黄褐色の粘土であり、竈で用いる粘土を保管していた土坑の可能性も考えられる。操業当時の地山である31層（暗褐色土）より上層にあり、廃業当時の地表面に近い1層（表土）及び3層（褐色土）よりも下層に位置していることから、操業開始後ある程度時間が経過した時点の遺構と考えられる。

土器集中出土遺物（遺構：第7図／遺物：第19図 - 8～第20図 - 18）

調査区南のうち、調査区北に隣接する部分で地表下30cm前後の8層（暗赤褐色土）で20cm程度の土器片や角礫が集中して出土する灰原を検出した。一部遺物を取り上げてしまった部分もあるが、灰原の遺物の広がり具合を確認するために8層で一度掘削を止めた。全体図の第7図中には遺物の広がり具合を「土器集中」として図示している。遺物は11点を図化した。詳細は第1表 出土遺物観察表を参照。

南区上層 地表面～地表下50cm出土遺物（遺物：第20図 - 19～第23図 - 38）

調査区南全体で、表土から地表下50cm程度までで出土した遺物の一部を図化した。詳細は第1表 出土遺物観察表を参照。

2. 調査区南下層

石列下層（遺構：第12図／遺物：第18図 - 5～7）

形状・規模 上層で検出した石列の下層である。便宜上、石列下層と名付けているが遺物包含層である。

出土遺物 石列除去後に掘り下げたところ、土のう袋20袋分の土器片が出土した。そのうち、3点を図化した。

調査所見 石列下層は、第12図で示したセクション図の6層及び8層以下にあたる。

4号石組（遺構：第11図／遺物：第24図 - 39～41）

形状・規模 1～3号落込に近接する。検出規模は東西約1.5m、南北約1.2mで、礫及び焼土除去後は円

形を呈する。深度は10cm程度と浅い。

出土遺物 甕の口辺部、底部と平瓦が出土した。

調査所見 検出時、礫と共に焼土を検出した。礫に若干の被熱が見られたため、火を用いた遺構と考えられるが、性格は不明である。礫を取り除き、焼土範囲を掘削したところ、第11図に見られるような円形を呈する浅い穴となった。

1号落込（遺構：第13図／遺物：第24図 - 42～第26図 - 54）

形状・規模 調査区東壁に位置する。検出規模は東西約80cm、南北約2.6mである。4号落込とベルトをはさんで隣接しており、1号落込上端線の延長線上に4号落込の上端線が位置することから、本来は同一の遺構と考えられる。

出土遺物 覆土がすべて土器といってもよい。遺物はほとんど陶質土器片であることから、落込に足を踏み入れると土器がこすれてジャリジャリと音が鳴る。図化遺物は挿鉢が主体であるが、陶質土器ではない。本遺構は調査区全体と比べて挿鉢の含有量が多い遺構であったが、ひび割れが多く焼成不良の挿鉢ばかりで、接合が困難な個体もあった。

調査所見 検出面である31層（暗褐色土）に達した時から、本遺構では多量の陶質土器片を確認していた。土器片を丁寧に除去しつつ掘削を行ったところ、調査区外の東側へ落ち込んでいる様子が伺えた。図化遺物以外の土器片は5cm程度の陶質土器片であり、掘削を行っていない調査区東壁にも多量の土器片を包含している。土器片がほぼ均一かつ陶質土器ばかりを含んでいることから、意図的に本遺構に陶質土器を投棄、もしくは地山を人力掘削して本遺構を設けた可能性も考えらる。

2号落込（遺構：第14図／遺物：第26図 - 55～56）

形状・規模 調査区南東壁に位置する。検出した規模は東西約60cm、南北約2.7mである。3号落込とは隣接しているが、境界は明瞭ではない。遺構のほとんどは調査区外に伸長する。

出土遺物 図化遺物は挿鉢と平瓦である。

調査所見 1号落込の覆土に比べ土器の包含量は少ないものの、遺構の性格は1号落込と同様と思われる。

3号落込（遺構：第12図・14図／遺物：第27図 - 57）

形状・規模 検出規模東西3.4m程度、南北2.6m程度で、調査区外にも伸長する。半島状の地山が遺構内に突出している。

出土遺物 遺構覆土から土器片の出土はあったが、図化した遺物は1点のみである。窯の温度が予想以上に高温となって溶けた陶質土器で、甕の口縁から胴部だと思われる部分が見て取れる。出土遺物はこのような遺物が数点出土した。

調査所見 石列下層を掘削し31層（暗褐色土）にいたったところで検出した。覆土は窯体片や土器片、焼土塊や被熱した角礫を含んでおり、落ち込んでいる本遺構部分にそれらを投棄したものと考えられるが、1号落込と同様に人力掘削の可能性もある。なお、31層以下を部分的に深掘したところ、32層・33層（褐色土・茅ヶ岳南麓地域の地山）を検出した。

4号落込（遺構：第13図／遺物：第27図 - 58～第28図 - 60）

形状・規模 調査区東壁に位置する。検出規模は東西約1.2m、南北約1.6mである。1号落込とベルトをはさんで隣接しており、本来は1号落込・4号落込は同一遺構と考えられる。

出土遺物 図化遺物は、広口壺と火鉢類である。

調査所見 1号落込に比べ覆土の土器含有量は多くない。調査最終段階でベルトを崩し、遺構のつながり

を確認したところ、ベルトが存在した部分で土器の含有量が変化した。そのため、1号落込と同一遺構と考えられるが、覆土には差異があることが判明した。なお、上端・下端線にかかる部分の一部を深掘りしている。前述の落込同様、地山を人力掘削して落込を設けた可能性もある。

南区下層 地表下 50～110cm出土遺物（遺物：第28図 - 61～第32図 - 89）

地表下 50cm～110cm程度までに出土した遺物の一部を図化した。詳細は第1表 出土遺物観察表を参照。

3. 調査区北

5号石組 欠番

6号石組（遺構：第15図）

形状・規模 検出規模は長軸短軸とも約40cmで、完掘時は円形を呈する。掘り込みは浅く10cm程度。

出土遺物 図化遺物なし。

調査所見 調査区南で検出した石組と類似する遺構。本遺構を含め、7号石組、8号石組も礫が集積していたため遺構と考えたが、用途などは不明で遺構ではない可能性もある。

7号石組（遺構：第15図）

形状・規模 検出規模は東西約50cm、南北約60cmで、完掘時は円形を呈する。掘り込みはかなり浅く10cmにも満たない。

出土遺物 図化遺物なし。

調査所見 6号石組と同様である。

8号石組（遺構：第15図／遺物：第32図 - 90）

形状・規模 検出規模は長軸短軸とも70cmで、完掘時は不整形となる。掘り込みはかなり浅く10cmに満たない部分もある。

出土遺物 図化遺物は1点。

調査所見 6号石組と同様であるが、礫は一部立石状を呈している。

5号落込（遺構：第16図／遺物：第32図 - 91～93）

形状・規模 検出規模は東西約3.2m（調査区東西幅と同一）、南北約70cm。

出土遺物 火鉢類の底部など3点を図化した。

調査所見 南側に向けて落ち込んでいる様子が見られるが、調査区外に伸長しているため、下端線は不明である。

6号落込（遺構：第16図／遺物：第32図 - 94）

形状・規模 一部のみ検出した。検出規模は東西約1.2m、南北約40cmである。

出土遺物 円形工具による刺突文がある土器1点を図化した。

調査所見 遺構のほとんどは調査区外に伸長するため、下端線は不明。

埋設土器（遺構：第17図／遺物：第33図 - 95～96、第34図 - 97）

形状・規模 表土除去時に検出し土器が全周するように思えたが、接合時には食い違ふことが判明した。検

出規模は東西約 76cm、南北約 70cm。図面作成のため西側を掘削したところ、部分的に折れてしまった。

出土遺物 95 は検出面で出土した口辺部だが、96 の同一個体ではない。96 は甕とおぼしき埋設土器本体で、胴部上半から口縁部にかけては出土していない。95・96 とともに陶質土器である。97 は埋設土器内部最下層から出土した凝灰岩製の砥石。

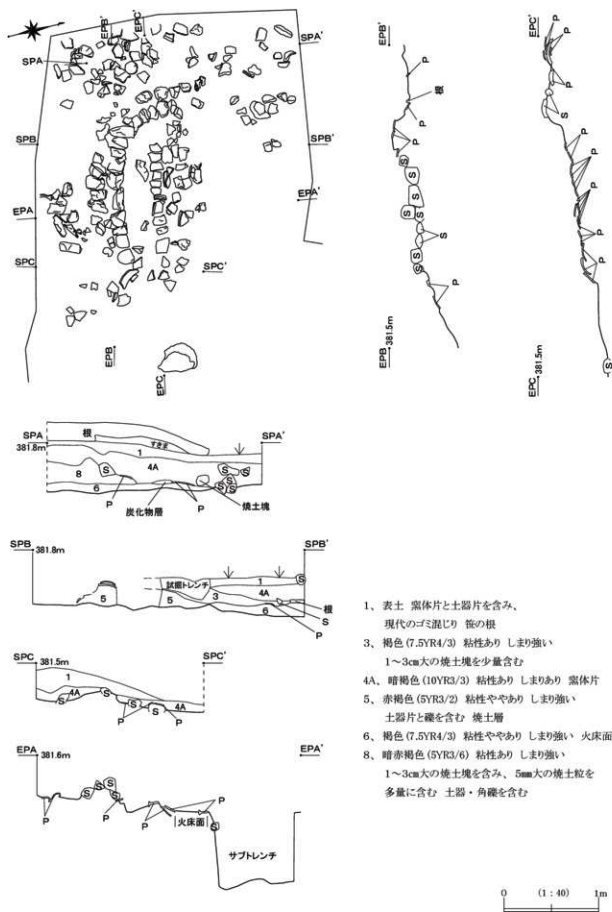
調査所見 土層堆積状況から、操業当初から設置されていたものではないと判断した。まず、操業当時の地表面である 31 層（暗褐色土）の上に 13 層（土器片などを含む層）が堆積する。その後、13 層を一部除去して土器を据え置き、14E 層（粘土層）で土器を安定させる。土器内部に①層（褐色土）と②層（明褐色土の粘土層）が堆積したところで、8 層（暗褐色土）が堆積して土器全体が埋没するという過程を踏んだと想定した。14E 層の粘土は、セクション図には表れていない土器西側部分に多く見られた。このことから、土器を据え置くための 13 層の掘削は、西側付近から掘削し、14E 層を添えて安定させたと考えられる。

土器内部最下層の②層が付着していた部分は、水が溜まっていた痕跡が土器内部に見られる。尿石が付着していないことから、通常の水瓶として使用していたと考えられるが、土器を接合した結果、全周するものの食い違い部分があり、水瓶の用途としては疑問が残る。土器は色調や胎土から本遺跡で焼成されたものと考えられる。

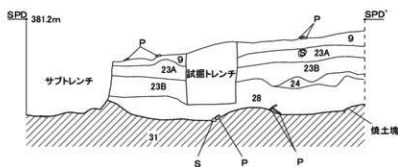
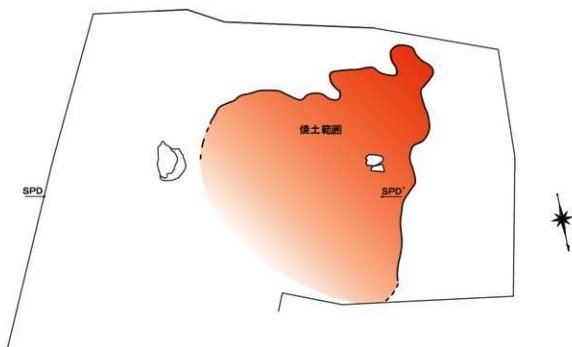
また、第 2 章第 2 節で簡単に述べたが、平成 15 年に本遺跡近くの宇津谷字笠石の個人所有の畑（宇津谷 2736-1）から埋設された甕が出土し、山梨県埋蔵文化財センターが部分的に調査を行っている。畑から出土した甕は、胎土や色調から本遺跡で生産された甕と位置付けられており、胴部上半より上は現存せず、胴部下半を地中に埋めている。胴部上半も存在していた上で埋設された可能性は否定できないが、本遺構の埋設土器と非常によく似た設置例である。なお、畑はかつて屋敷地であったことが近隣住民からの聞き取りで判明しているため、屋敷地内で用いるために甕を埋設したと考えられる。本遺跡出土の埋設土器は全周せず食い違いが生じているものの、笠石で出土した甕と同様の目的で地中に据えられたと考えられる。

北区 地表面～地表下 50cm 出土遺物（遺物：第 34 図 - 98 ～第 37 図 - 117）

地表面から地表下約 50cm までに出土した遺物の一部を図化した。特異な遺物として、平瓦片が 7 点出土している。なお、調査区南では地表面付近の上層から 2 点、遺構を含む下層から 3 点の平瓦片が出土している。詳細は第 1 表 出土遺物観察表を参照。



第8図 南区上層／石列検出



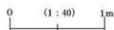
9、焼土塊・土器・窯体片層

23A、暗赤褐色 (5YR3/2) 粘性強い しまり強い 1cm大の焼土塊を多量に含み、5mm大の炭化物を含む

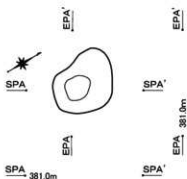
23B、暗赤褐色 (5YR3/2) 粘性強い しまり強い 1cm大の焼土塊を含み、5mm大の炭化物を含む

24、黒褐色 (10YR3/2) 粘性あり しまりあり 1cm大の焼土塊と炭化物を含む

28、10～20cm大の窯体片と土器片、5～10cm大の焼土塊、3cm大の炭化物を含む層、3号落込覆土

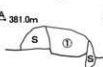
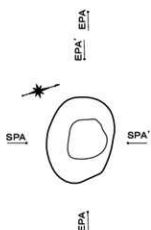
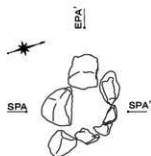


第9図 南区上層／石列完掘



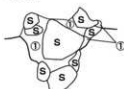
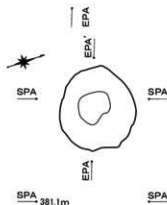
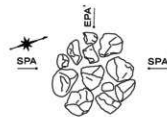
1号石組

①、暗赤褐色 (5YR3/4) 粘性あり しまり強い
1cm大の焼土粒、5mm大の炭化物を含む



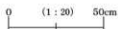
2号石組

①、暗赤褐色 (5YR3/4) 粘性あり しまり強い
1cm大の焼土粒、5mm大の炭化物を含む

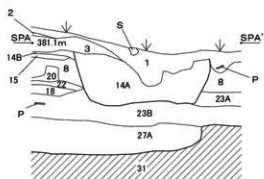
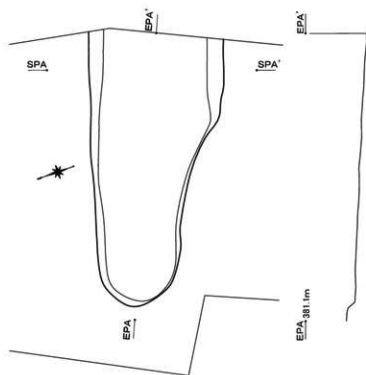


3号石組

①、暗赤褐色 (5YR3/4) 粘性あり しまり強い
1cm大の焼土粒、5mm大の炭化物を含む

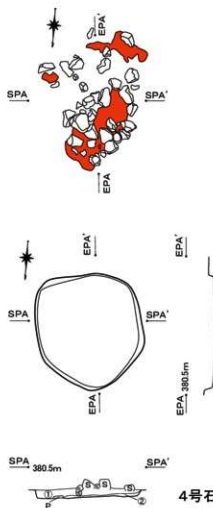


第 10 図 南区上層／1号～3号石組



14A、粘土層 黄褐色(10YR5/6) 粘性強い しまり強い

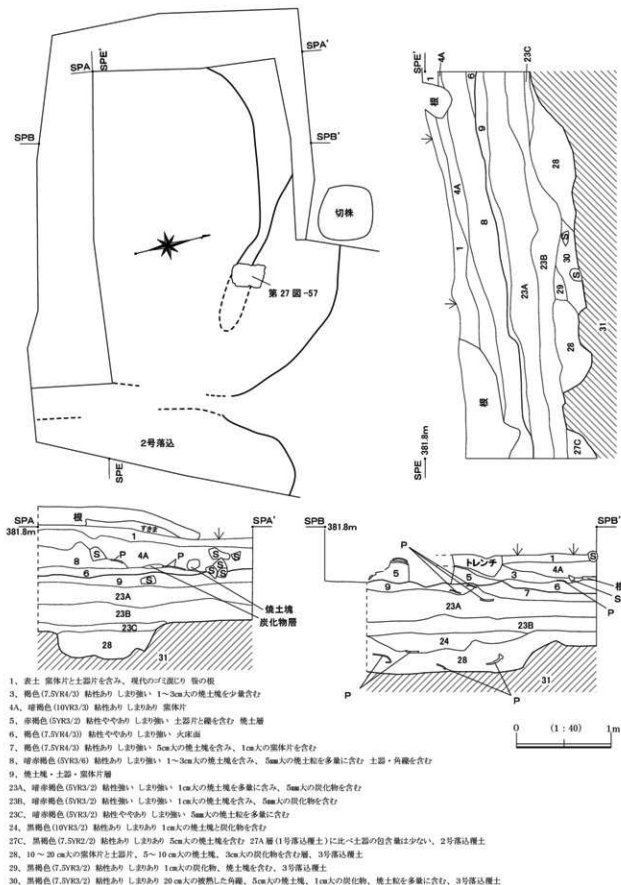
1号土坑



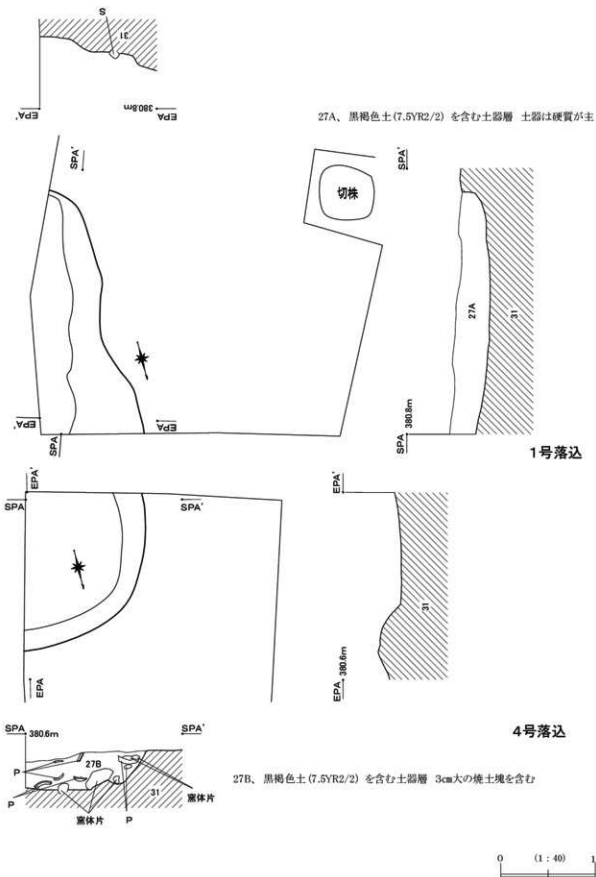
- ①、暗褐色(10YR3/3) 粘性あり しまり強い
1cm大の炭化物を含む
3cm大の粘土塊 (にぶい黄褐色 10YR5/4) を
少量含む 1cm大の焼土粒を少量含む
- ②、暗褐色(10YR3/4) 粘性あり しまり非常に強い
1mm大の焼土粒を含み、1mm大の炭化物を
少量含む



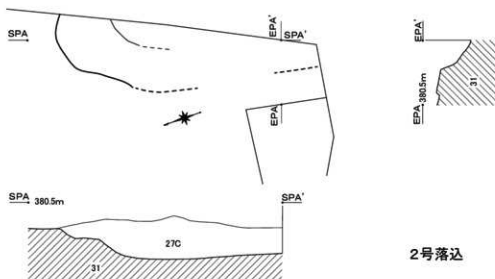
第 11 図 南区上層／1号土坑・南区下層／4号石組



第12図 南区/石列下層 (土層堆積状況)

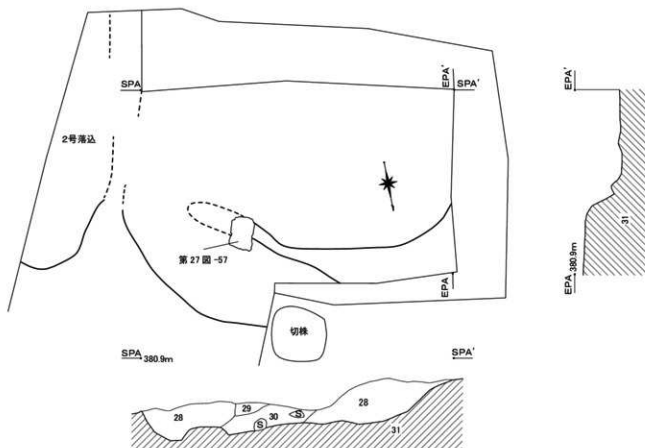


第 13 図 南区下層／1号及び4号落込



2号落込

27C、黒褐色(7.5YR2/2) 粘性あり しまりあり 5cm大の焼土塊を含む 27A層(1号落込覆土)に比べ土器の包含量は少ない



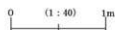
3号落込

28、10～20cm大の窯体片と土器片、5～10cm大の焼土塊、3cm大の炭化物を含む層

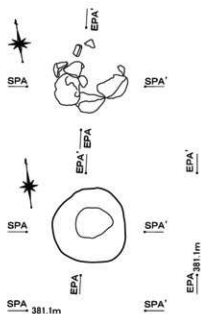
29、黒褐色(7.5YR3/2) 粘性あり しまりあり 1cm大の炭化物、焼土塊を含む

30、黒褐色(7.5YR3/2) 粘性あり しまりあり

20cm大の被熱した角礫、5cm大の焼土塊、1cm大の炭化物、焼土粒を多量に含む



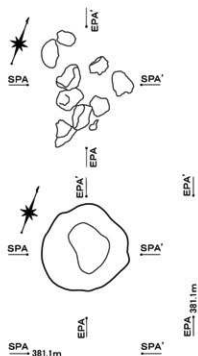
第14図 南区下層／2号及び3号落込



6号石組

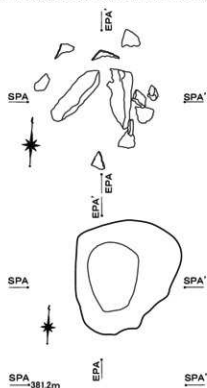
- ①、黒褐色 (7.5YR3/2) 粘性あり しまりあり
②、暗赤褐色 (5YR3/2) 粘性あり しまりあり

5mm大の焼土粒と炭化物を含む 覆土内の土器は小片で脆い



7号石組

- ①、黒褐色 (7.5YR3/2) 粘性あり しまりあり

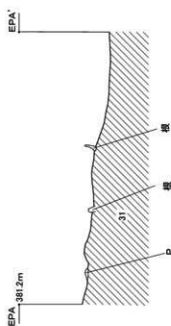
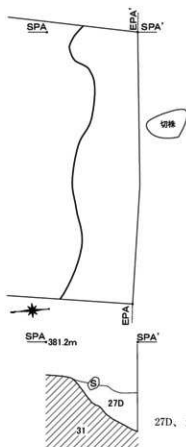


8号石組

0 (1:20) 50cm

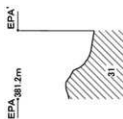
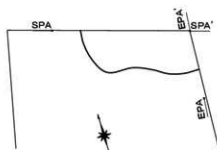
- ①、黒褐色 (7.5YR3/2) 粘性あり しまりあり
②、褐色 (7.5YR4/4) 粘性あり しまり強い 5mm大の焼土粒を少量含む
③、暗褐色 (7.5YR3/3) 粘性あり しまりあり

第15図 北区/6号～8号石組



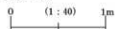
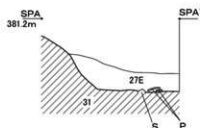
5号落込

27D、土器片と焼土塊が多量に混じる層 極暗褐色 (7.5YR2/3) 粘性あり しまりあり

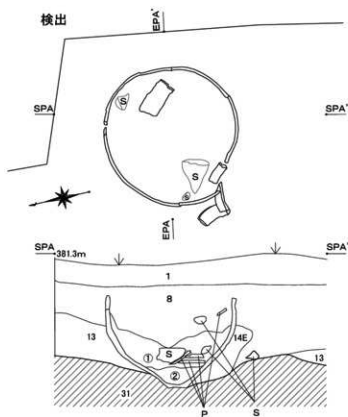


6号落込

27E、多量の土器片を含む層 暗褐色土 (7.5YR3/4) を包含する



第 16 図 北区 / 5号及び 6号落込



土器内部

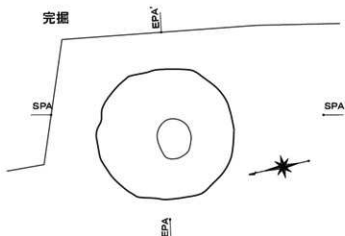
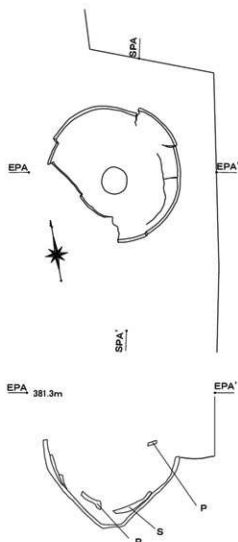
- ①、褐色 (10YR4/4) 粘性あり しまりあり
 ②、明褐色 (10YR5/6) 粘性非常に強い しまり強い 粘土層
 褐灰色 (10YR4/1) の粘土を少量含む

1、表土 腐体片と土器片を含み、現代のゴミ混じり 笹の根

8、暗赤褐色 (5YR3/6) 粘性あり しまり強い 1~3cm大の焼土塊を含み、5mm大の焼土粒を多量に含む 土器・角礫を含む

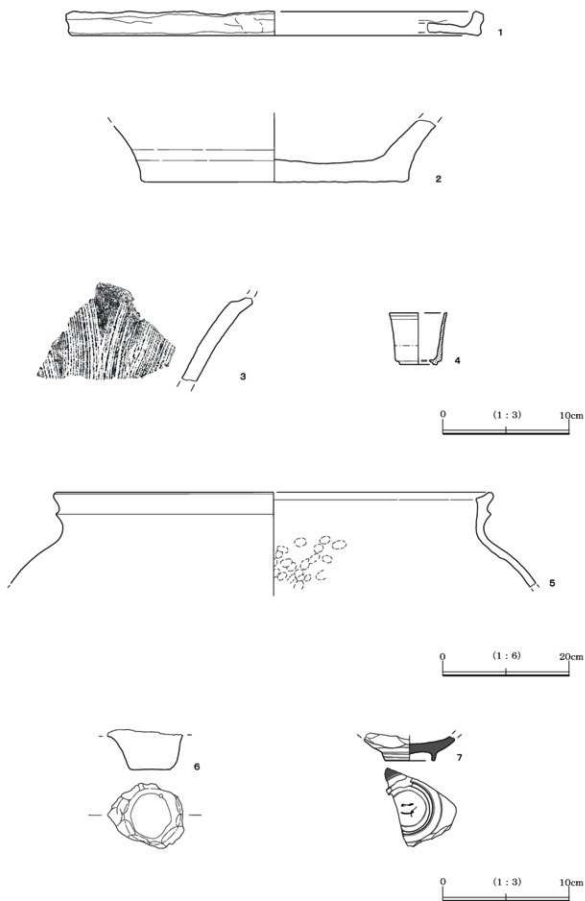
13、土器片、5~10 cm大の焼土塊、10 cm大の礫を含む 黒褐色土 (7.5YR3/2) を包含する

14E、粘土層 明褐色 (10YR5/6) 粘性非常に強い しまり強い 褐灰色 (10YR4/1) の粘土を少量含む

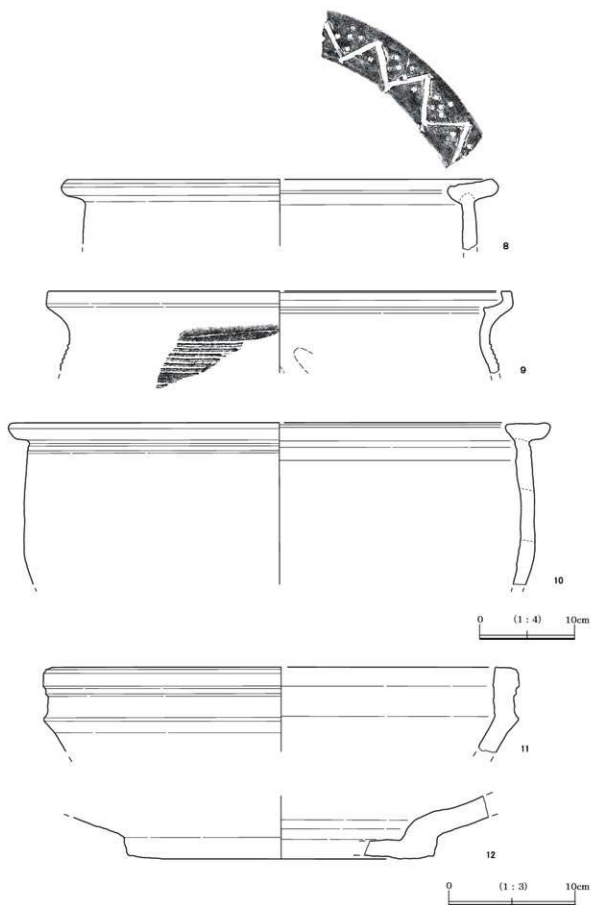


0 (1:20) 50cm

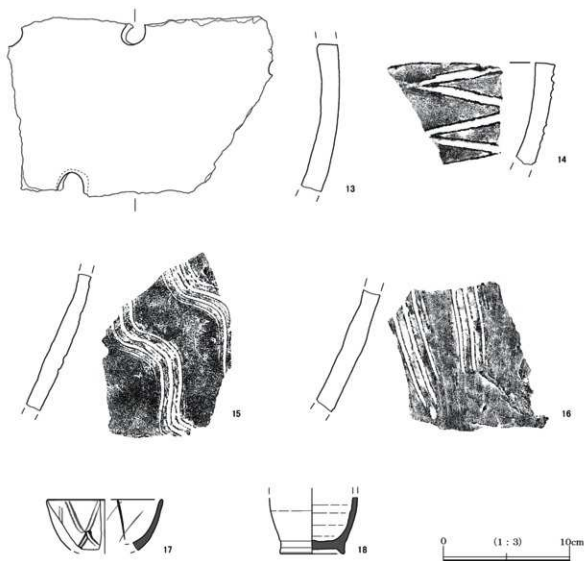
第 17 図 北区/埋設土器



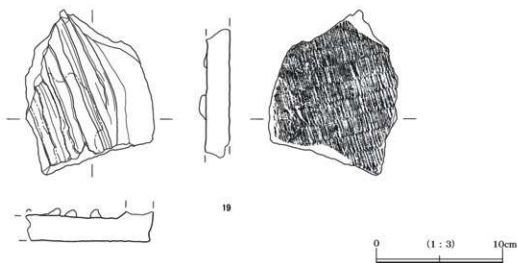
第 18 图 南区上層／石列出土遺物



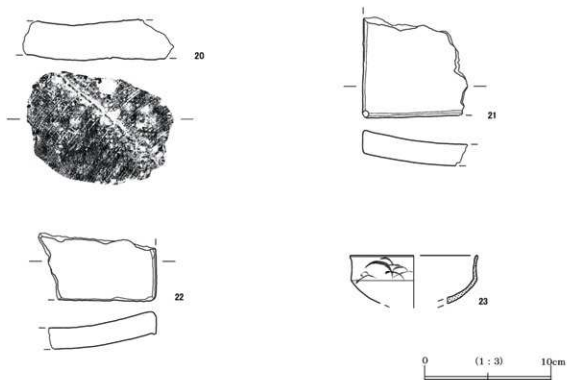
第 19 图 南区上層／土器集中出土遺物



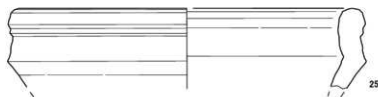
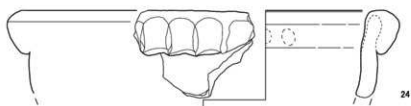
南区上層／土器集中出土遺物



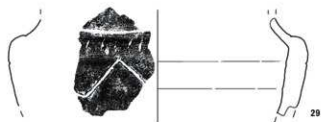
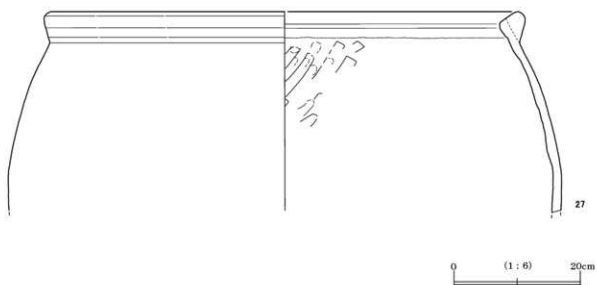
第 20 図 南区上層／土器集中出土遺物・地表面採集遺物



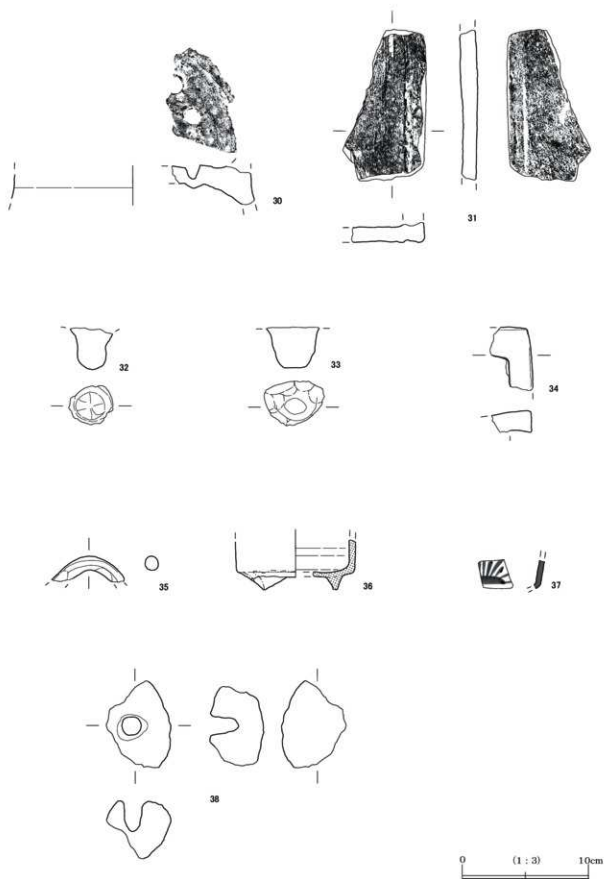
南区上層／地表面採集遺物



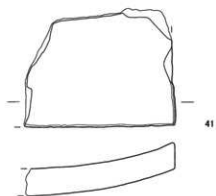
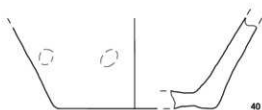
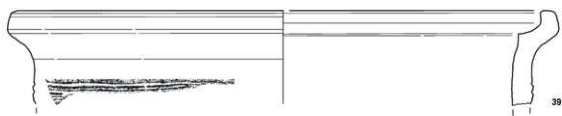
第 21 図 南区上層／地表面採集遺物・地表面～地表面 50cm 出土遺物



第 22 図 南区上層／地表面～地表下 50cm 出土遺物

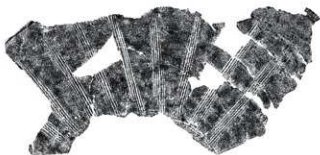


第 23 図 南区上層／地表面～地表下 50 cm出土遺物



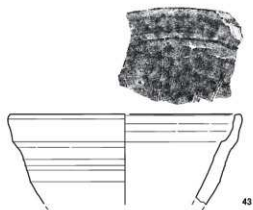
0 (1 : 3) 10cm

南区下層／4号石組出土遺物

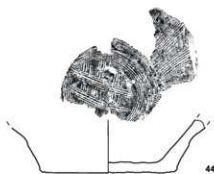


0 (1 : 4) 10cm

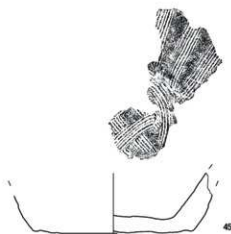
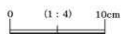
第 24 図 南区下層／4号石組・1号落込出土遺物



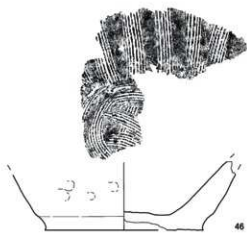
43



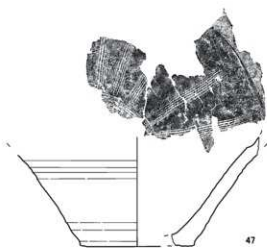
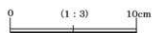
44



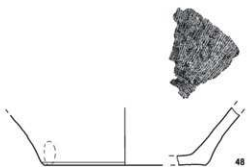
45



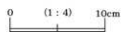
46



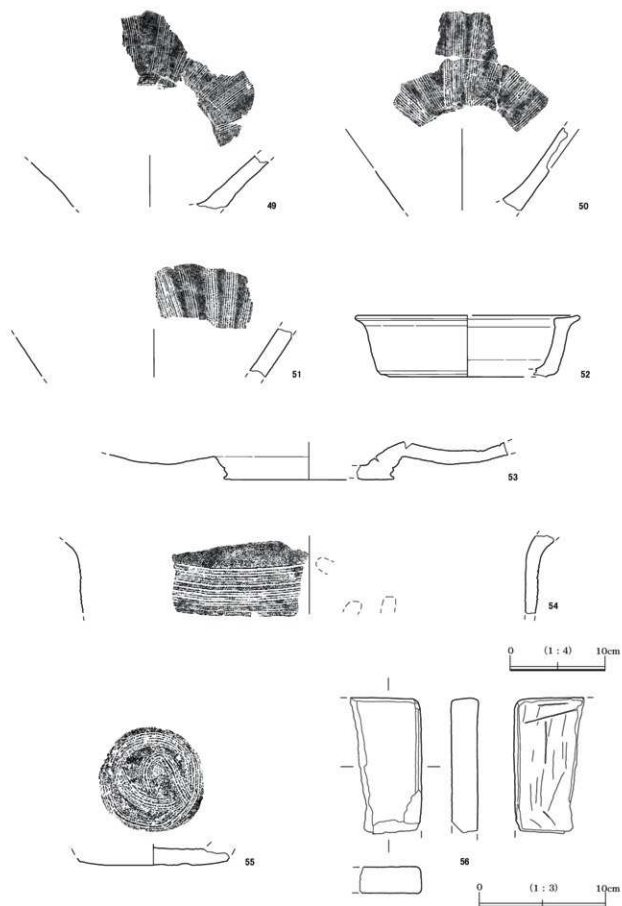
47



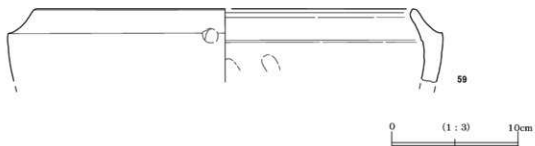
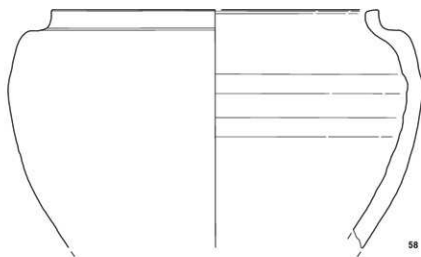
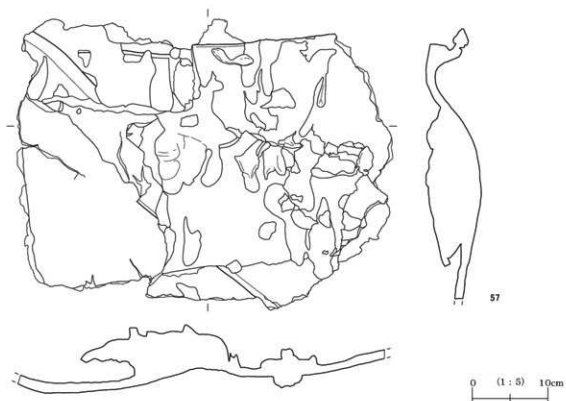
48



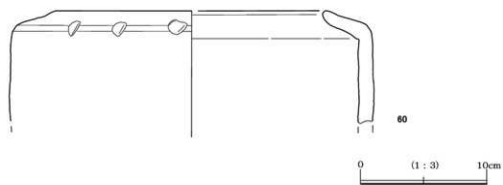
第 25 图 南区下層 / 1 号落込出土遺物



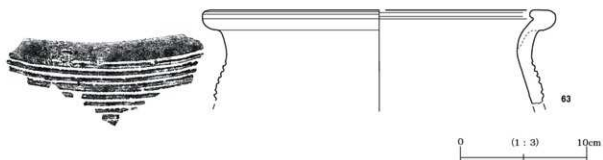
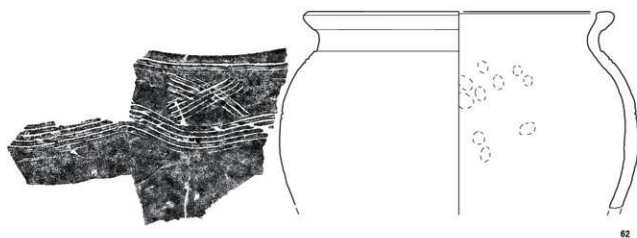
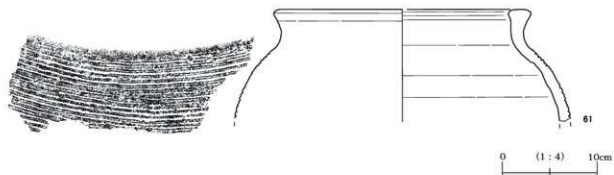
第 26 図 南区下層 / 1 号及び 2 号落込出土遺物



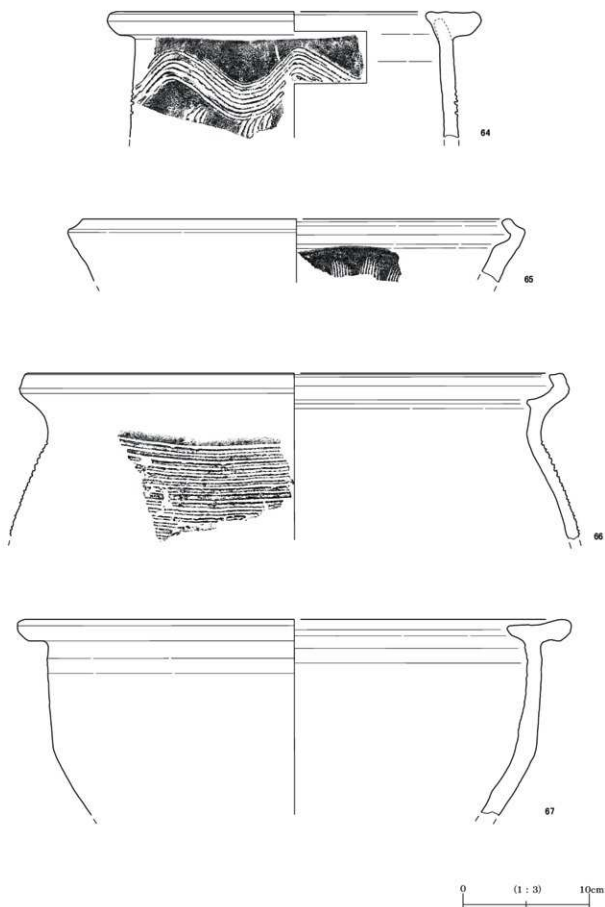
第 27 図 南区下層／3号及び4号落込出土遺物



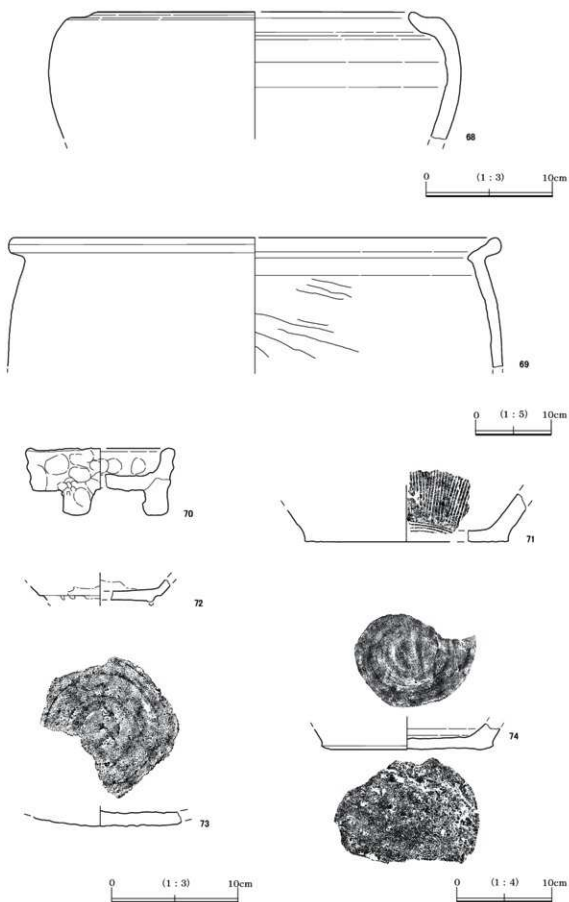
南区下層／4号落込出土遺物



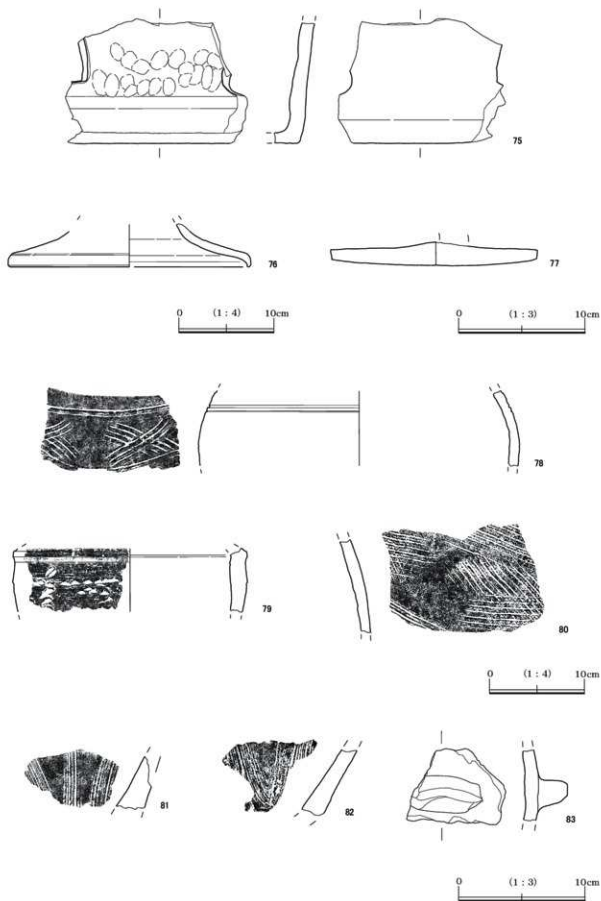
第 28 図 南区下層／4号落込・地表下 50 cm～110 cm出土遺物



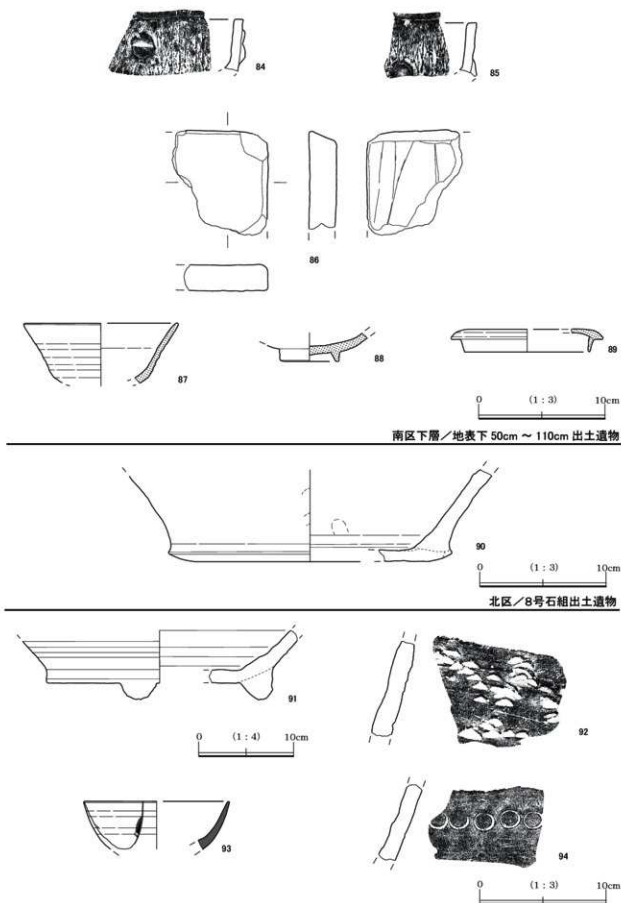
第 29 図 南区下層／地表下 50 cm～110 cm出土遺物



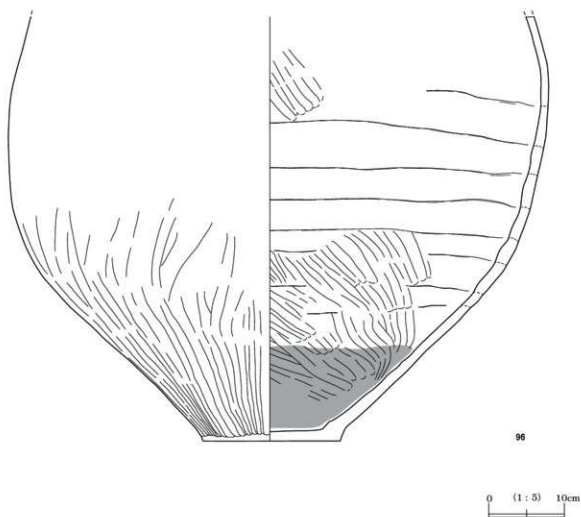
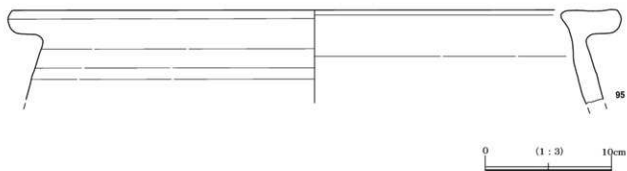
第 30 图 南区下層／地表下 50 cm～110 cm 出土遺物



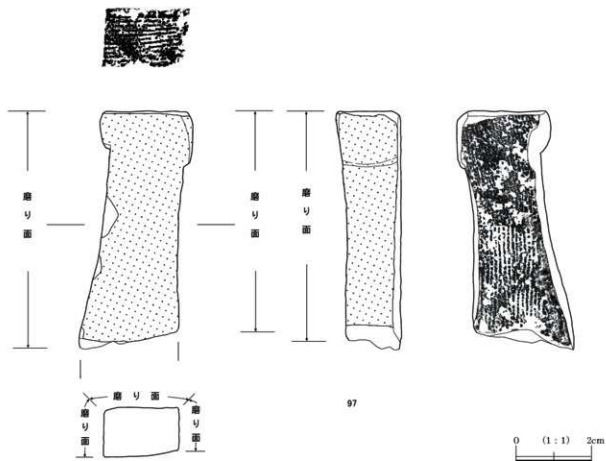
第 31 图 南区下層/地表下 50cm ~ 110 cm 以下出土遺物



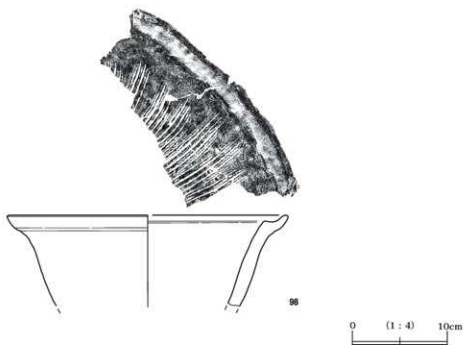
第 32 図 南区下層/地表下 50cm ~ 110 cm 出土遺物 北区/8号石組・5号及び6号落込出土遺物



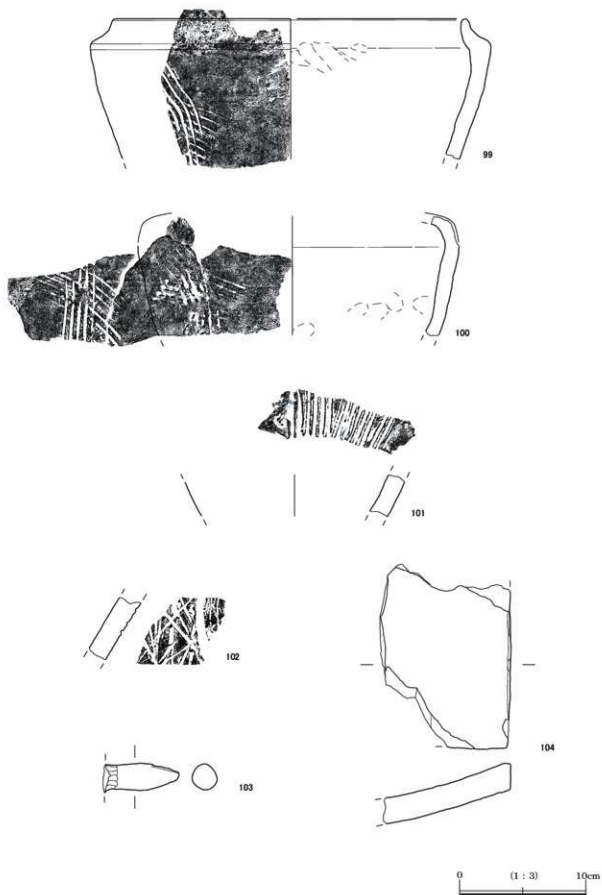
第 33 図 北区／埋設土器出土遺物



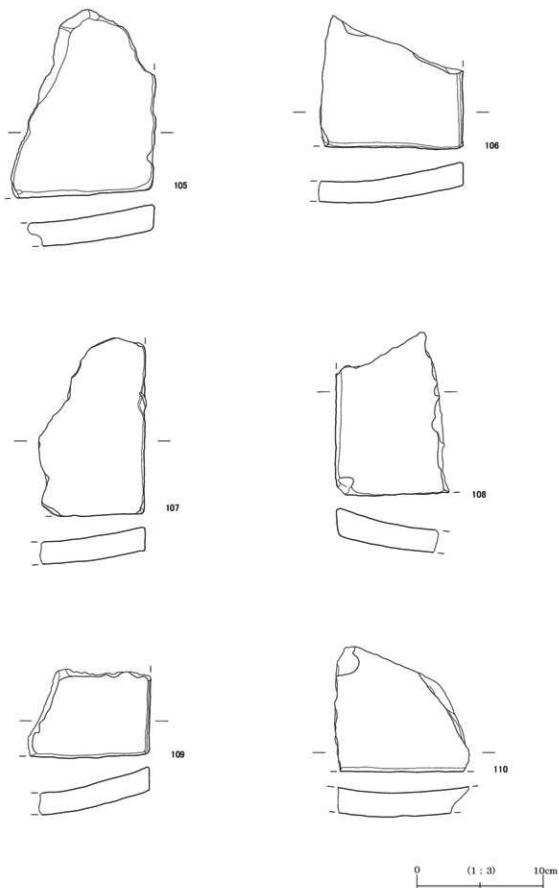
北区／埋設土器出土遺物



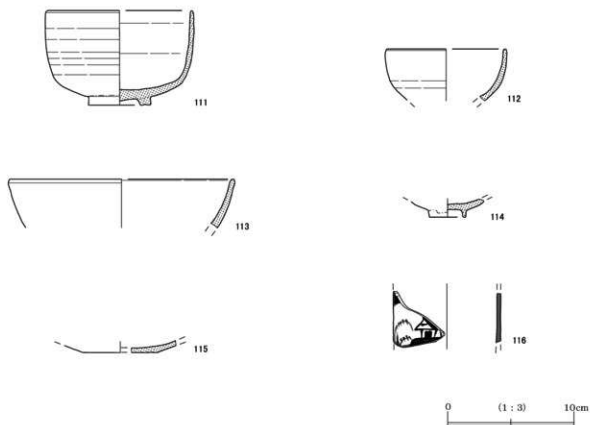
第 34 図 北区／埋設土器・地表面～地皮下 50 cm 出土遺物



第 35 図 北区／地表面～地表下 50 cm出土遺物



第 36 図 北区／地表面～地表下 50 cm出土遺物



北区／地表面～地表下 50 cm出土遺物



第 37 図 北区／地表面～地表下 50 cm出土遺物 工事立会い時地表面採集遺物

第1表 出土遺物観察表

番号	注記番号	部類	器形	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	色 調	胎 土	焼成	器形の特徴
1	TGK15-石列内側768	土器	燈台か	1.9	(32.2)	(32.6)	にがい・赤褐色 2.5YR4/4	長石・金雲母を含む	良好	平づくね・内面ナツ調整、外面指摺痕あり
2	TGK15-石列内側771 1222	土器	燈台の胴部	残4.8	—	(21.4)	赤褐色 2.5YR5/6	長石・石英を含む	やや良	内面ナツ調整、口びれ斜め多し／外面指摺痕部分的に剥落
3	TGK15-石列内側773	土器	燈台(胴部)	残6.6	—	—	にがい・赤褐色 5YR4/3	長石・石英を含む	良好	—
4	TGK15-石列付近 1767	陶器	猪口	4.1	4.5	(3.0)	輪割面ナツ調整 10YR6/2 磨面部 浅黄 2.5Y7/4	極小の白色砂子を含む	良好	内面及び外面口縁部から体部に施輪
5	TGK15-石列1784	陶質土器	甕(口辺部)	残15.2	(69.0)	—	灰白 10R4/2	金雲母・長石・白色砂子を含む	良好	内面口縁部横ナツ、内面体部指摺痕
6	TGK15-石列1756	土器	燈台の胴部	残3.1	3.2	—	横 7.5YR6/6	長石・石英・白色砂子・赤色砂子を含む	良好	指摺痕多数あり
7	TGK15-石列1792	磁器	碗	残1.9	—	4.0	灰白 7.5Y7/1	縦割、黒色顔料子を含む	良好	外面染付 取り付く高台
8	TGK15-土壺1726	土器	甕(口辺部)	残7.5	(45.0)	—	にがい・黄 7.5YR6/4	長石・赤色砂子・石英	良好	口唇部面状施文、甕面内部に5mm前後の刺突1ヶ所、胴部と同様の刺突5ヶ所／内面横位ナツ
9	TGK15-土壺1726	土器	甕(口辺部)	残8.6	(47.0)	—	灰黄褐 10YR5/2	白色砂子を含む、微量の長石を含む	良好	内面横位ナツ調整、指摺痕／外面体部磨面・磨面加工による沈着文
10	TGK15-土壺1770	土器	甕(口辺部・胴部)	残17.1	(56.2)	—	にがい・赤褐色 5YR4/3	長石、白色砂子	良好	内面口縁部の口縁ナツ／外面に「人」字状の磨面と凸凹のあり
11	TGK15-土壺1726	土器	甕(口辺部)	残7.8	(34.0)	—	横 5YR7/6	長石・白色砂子・石英	良好	口辺部全体に横位ナツ、25に接合する
12	TGK15-土壺下側1729	土器	甕(口底部)	残5.0	—	(21.4)	にがい・黄褐 10YR7/2	長石・石英	良	内面ナツ／外面底部5mm大の小輪、白色砂子、長石を含む
13	TGK15-土壺1728	土器	燈台(胴部)	残14.0	—	—	黄灰 2.5Y4/1	長石・石英を含む	良	5ヶ所穿孔(直径1.8cm～2cm)あり
14	TGK15-土壺1726	土器	不明	残8.1	—	—	にがい・黄褐 10YR7/4	長石を含む	良好	内面横位ナツ調整／外面平截竹管状工具で脱角な「く」の字状施文後、土壺上部ナツ調整
15	TGK15-土壺下側1729	土器	甕(胴部)	残10.8	—	—	にがい・赤褐色 5YR5/4	長石・石英・白色砂子	良好	外面波状の文を施す
16	TGK15-土壺1728	土器	甕(胴部下)	残9.7	—	—	にがい・赤褐色 5YR5/4	長石・石英・白色砂子	良好	内面横位ナツ／外面へツ状工具による縦位施文
17	TGK15-土壺1728	磁器	碗	残4.0	(9.2)	—	灰白 10YR1/1	縦割	良好	内外面染付文あり
18	TGK15-土壺1728	陶器	燈台か	残4.5	—	5.2	灰白 5Y7/1	キム離かい	良好	内面輪割に磨面あり／外面輪割は光沢あり、貼付痕あり
19	TGK15-1714	土器	不明	残2.4	—	—	横 5YR6/6	長石・石英を含む	良好	内面口縁部ナツ付 輪割付着／外面底部にシロ面あり
20	TGK15-1797	土器	甕の底部か	最大長 11.2 最大幅 3.1	最大厚 3.1	—	にがい・赤褐色 5YR5/4	長石・石英・赤色砂子・小輪	やや良	内外面底部磨面・特に外面の方が明確、磨面の磨面ナツ調整
21	TGK15-779(2226から 1795)	瓦	平瓦	最大長 8.0 最大幅 8.3 最大厚 1.8	—	—	灰黄褐 2.5Y4/2	石英・白色砂子・長石	良好	全面ナツ調整、両面底部面取り
22	TGK15-779(2226から 1795)	瓦	平瓦	最大長 4.8 最大幅 8.8 最大厚 1.7	—	—	黄灰 2.5Y4/1	長石・石英	良好	全面ナツ調整、両面底部面取り
23	TGK1-1796	陶器	碗	残3.8	(10.0)	—	灰白 7.5Y7/2	縦割	良好	内外面施輪(灰輪) 縦に施す
24	TGK15-1716	土器	甕(口辺部)	残6.9	(29.0)	—	横 5YR7/6	金雲母・長石	良好	内面指摺痕、横位ナツ／外面口縁部突起状区画
25	TGK15-1718	土器	甕(口辺部)	残6.4	(26.6)	—	にがい・黄褐 5YR6/4	長石・石英	良好	内外面横位ナツ、11と接合する
26	TGK15-1799	土器	甕(口底部)	残3.65	—	(18.0)	黄灰 5YR4/1	金雲母・長石	やや良	内面に若干の亀裂(焼きゆがみ)あり
27	TGK15-1791	土器	甕	残32.1	(74.4)	—	横 5YR7/8	長石・石英・少量の金雲母	良好	内面口縁部の横ナツ、以下横位ナツ、指摺痕／外面横ナツ
28	TGK15-1772	土器	甕(底部)	残1.55	—	(20.4)	横 5YR6/6	白色砂子、微量の石英	良好	底部に1mm大の白色砂子と金雲母付着(点状)
29	TGK15-1733	土器	口辺部 (口縁・体部)	残7.5	—	—	横 7.5YR7/6	長石・石英・白色砂子	良好	内外面横ナツ／外面胴部工具によるキザミ文、体部波状の文様
30	TGK15-779(2226から 1771)	土器	七周か	残3.0	—	—	にがい・黄褐 10YR6/4	長石	やや良	穿孔部2ヶ所のうち1ヶ所は穴が詰まっている
31	TGK15-1717	土器	不明	残1.6	—	—	横 5YR6/6	石英・赤色砂子・黒雲母	良好	断面に白色砂子、黒雲母、石英多数に付着
32	TGK15-1719	土器	火鉢類の胴部	残3.2	—	—	にがい・黄褐 7.5YR6/4	長石・石英・白色砂子を含む、微量の赤色砂子を含む	良好	平づくね成形
33	TGK15-1718	土器	火鉢類の胴部	残3.2	1.8	—	にがい・黄褐 5YR5/4	長石・石英・白色砂子・赤色砂子	良好	平づくね成形、指摺痕多数あり
34	TGK15-1718	土器	火鉢類か	最大長 4.8 最大幅 3.2 最大厚 1.6	—	—	横 7.5YR6/6	長石・石英・白色砂子・赤色砂子	良好	火鉢類ないし火打ち箱の縁部か
35	TGK15-1725	土器	鍋類の把手か	残2.0	—	—	にがい・赤褐色 5YR5/4	長石・黒雲母を含む	良好	—
36	TGK15-1711	陶器	香炉	残3.95	—	6.6	外面磨 10YR4/4 内面にいり・赤褐色 5YR5/4	雲母・白色砂子を含む	良好	外面体部施輪、胴部一ヶ所残存
37	TGK15-1725	磁器	碗類	残2.2	—	—	灰白 7.5Y7/1	縦割	良好	内面ごく一部に染付あり／外面染付あり
38	TGK15-1720	石製品	くぼみ石	最大長 6.3 最大幅 5.2 最大厚 4.1	—	—	—	—	—	用途不明 縦穴部が、穿孔部2.3cm
39	TGK15-石組4754-1	土器	甕(口辺部)	残7.5	(41.4)	—	黄灰黄 2.5Y5/2	長石・赤色砂子を含む	やや良	内面横位ナツ 外面横位へツ状工具で施文
40	TGK15-石組4754	土器	甕(口底部)	残7.2	—	(12.4)	にがい・黄褐 10YR7/4	長石・赤色砂子・石英・雲母を含む	良好	内外面ともに口びれ調整
41	TGK15-石組4754-2	瓦	平瓦	最大長 9.2 最大幅 12.1 最大厚 2.15	—	—	2.5Y5/2	長石・石英・白色砂子を含む	良好	ナツ仕上げ

番号	注記記号	母種	形状	容積 (cm)	口径 (cm)	直径 (cm)	色 調	胎 土	焼成	形状の特徴
42	TGKIS-1746	土器	楕鉢 (口辺～胴部)	残16.3	(24.6)	—	にぶい黄緑 7.5YR6/4	長石・金雲母	やや黄	内面口辺部ナデ／外面ナデ
43	TGKIS-1746	土器	楕鉢(口辺部)	残9.6	(24.6)	—	にぶい黄緑 10YR6/4	長石・赤色粒子	やや黄	内面口辺部多数／外面ナデ
44	TGKIS-1746	土器	楕鉢(底部)	残5.6	—	(12.0)	にぶい黄緑 10YR5/3	長石・石英・金雲母・白色粒子	やや黄	—
45	TGKIS-1746	土器	楕鉢(底部)	残4.8	—	(12.0)	にぶい黄緑 7.5YR6/4	長石・金雲母	やや黄	—
46	TGKIS-1747	土器	楕鉢 (胴部下半～ 底部)	残6.5	—	(12.6)	灰黄緑 10YR6/2	長石・石英・雲母	不良	ひび割れと剥離多数／外面ナデ
47	TGKIS-1746	土器	楕鉢 (口辺～底部)	残12.1	—	(12.2)	にぶい黄緑 7.5YR6/4	長石・石英	不良	ひび割れと剥離多数／外面ナデ
48	TGKIS-77097から 1749	土器	楕鉢 (胴部下半～ 底部)	残6.1	—	(17.2)	黄灰 2.5Y4/1	長石	やや黄	ひび割れ／外面ナデ
49	TGKIS-1747	土器	楕鉢(胴部下半)	残5.5	—	—	にぶい黄緑 7.5YR6/4	長石・石英	やや黄	ひび割れ／外面ナデ
50	TGKIS-1746	土器	楕鉢(胴部下半)	残8.7	—	—	にぶい黄緑 7.5YR6/4	長石・金雲母	やや黄	ひび割れ／外面ナデ
51	TGKIS-1747	土器	楕鉢(胴部下半)	残5.0	—	—	にぶい黄緑 7.5YR5/3	長石・白色粒子	不良	ひび割れと外面剥離
52	TGKIS-1746	土器	燈籠 (口辺～ 胴部下半)	6.5	(23.4)	(16.8)	灰 7.5Y4/1	長石・石英・3mm大の小礫	不良	ひび割れ多数／内外面底部横状ナデ
53	TGKIS-1751	陶質土器	甕(口辺部)	残4.0	—	(18.0)	灰黄 7.5YR4/2	赤色粒子・長石・石英	やや黄	全体にきずあり／内面底部指痕及ひび ナデ／内外面底部粗粒状付着
54	TGKIS-1751	土器	甕(口辺部)	残8.2	—	—	黄灰 5YR6/6	長石・白色粒子	良好	内面指痕／外面横状の平行沈線文
55	TGKIS-1747	土器	楕鉢	残1.4	—	(11.8)	黄灰 5Y4/1	長石・赤色粒子・雲母・石英	良	外面底部砂粒付着
56	TGKIS-1747	瓦	平瓦	最大長 10.5	最大厚 5.3	最大径 2.15	にぶい黄緑 10YR5/3	長石・石英・白色粒子	良好	全面ナデ仕上り
57	TGKIS-1747	陶質土器	甕	最大長 36.8	最大幅 48.3	最大厚 7.1	暗赤灰 7.5R4/1	長石・石英	良好	焼ききず多い、口縁～胴部になびき が顕著
58	TGKIS-1747	土器	甕 (口辺～胴部)	残18.9	(26.0)	—	黄灰 2.5Y4/1	長石・小礫を含む	良好	内面胴部に指痕、内外面横ナデ
59	TGKIS-1747	土器	甕(口辺部)	残5.8	(30.0)	—	暗赤灰 2.5YR/2	長石・石英・5mm大の小礫を含む	良好	内面胴部指痕／外面胴部ナデ状の欠 け、横ナデ
60	TGKIS-1747	土器	大鉢類	残8.9	(21.4)	—	黄 7.5YR6/6	長石・石英・白色粒子を含む	良好	内外面横ナデ／外面胴部1cm大のナデ 文
61	TGKIS-1744-2	陶質土器	甕(口辺部)	残11.85	(26.0)	—	黄灰 10YR4/1	長石	良好	外面口辺部に指痕付着、割れ口にも一 部付着、胴部口下に複数の細い沈線
62	TGKIS-1745	土器	甕 (口辺～胴部)	残20.8	(32.0)	—	黄 5YR6/6	金雲母・長石・小礫	良好	内外面横ナデ／内面指痕／外面横 線状文に似た沈線文などあり
63	TGKIS-1750	陶質土器	甕(口辺部)	残7.4	(27.0)	—	灰 N4/	金雲母・長石・石英	良好	外面複数の横状沈線文あり
64	TGKIS-1735	土器	甕(口辺部)	残10.9	(28.8)	—	黄 7.5YR6/6	金雲母・長石	良好	内外面横ナデ／外面横線状文に似た 沈線文あり
65	TGKIS-1742	土器	楕鉢(口辺部)	残5.0	(34.2)	—	にぶい黄緑 7.5YR5/3	長石・白色粒子	良好	内外面ナデ
66	TGKIS-1744-2	土器	甕(口辺部)	残13.1	(42.4)	—	黄灰 2.5Y4/1	長石・石英・6mm前後の 小礫を含む	やや黄	内外面ナデ／内面底部指痕／外面横 線の横状沈線文あり
67	TGKIS-P2	陶質土器	甕(口辺部)	残15.3	(42.4)	—	灰 N4/	長石・少量の石英・多量の白色粒 子	良好	焼ききず、ひび割れあり
68	TGKIS-1744-2	土器	甕 (口辺～胴部)	残10.1	(25.0)	—	黄灰 7.5YR4/1	長石・赤色粒子・石英	良好	内外面横ナデ
69	TGKIS-P4	土器	大鉢類(胴部)	残17.0	(63.8)	—	黒褐 5YR2/2	長石・石英・5mm前後の小礫・白色 粒子	良好	内外面横ナデ／内面底部粗粒ナ デ、ひび割れあり
70	TGKIS-1732	土器	大鉢類(胴部)	5.3	(11.2)	(10.6)	5YR6/6	長石・石英・白色粒子	良好	手ねね成形、内外面ともに指痕多数あり
71	TGKIS-1742	土器	楕鉢	残3.8	—	(16.2)	灰黄 7.5YR4/2	白色粒子	やや黄	外面底部ナデ、底部砂粒付着、ひび割 れあり
72	TGKIS-1739	陶器	高台付碗	残1.75	—	—	黄 7.5YR7/6	長石	良好	割出し高台、縁部の塗布は粗雑
73	TGKIS-1741	土器	甕(口辺部)	残1.2	—	—	にぶい黄緑 7.5YR5/3	長石・石英・白色粒子	良好	内面底部円状ナデ／外面底部未調整
74	TGKIS-1744-1	土器	甕(口辺部)	残2.7	—	(18.2)	にぶい黄緑 7.5YR6/4	金雲母・長石・石英	不良	内面円状ナデ／外面底部未調整、剥離 ひび割れあり
75	TGKIS-77097から 1773	土器	大鉢・甕類	残13.2	—	(25.0)	黄 5YR6/6	長石・石英・白色粒子	良好	両面ともに指痕に相当する凹凸が縁あり ／内外面底部横ナデ／内面指痕／外 面横線のへた状工具でナデ調整
76	TGKIS-1744-2	土器	甕	残4.5	—	(25.4)	暗赤灰 2.5YR/2	長石・白色粒子	良好	内外面丁寧ナデ
77	TGKIS-1744	土器	甕	1.9	—	16.5	下面にぶい黄 10YR4/1 7.5YR6/4	長石・金雲母	やや黄	上面中央部付近に把手部分の痕跡あり ／下面ナデ、ひび割れあり
78	TGKIS-1745	土器	甕(口辺部)	残8.0	—	—	にぶい黄緑 10YR6/4	長石・赤色粒子・金雲母	良好	内面横ナデ、指痕／外面横状工具 による沈線文(平行・×目状)あり
79	TGKIS-77097から 1765	土器	甕(胴部)	残6.8	—	—	にぶい黄緑 5YR5/3	長石・3mm大の小礫・白色粒子	良好	内面横ナデ、外面横状ナデ後三角形 彫削文を施文
80	TGKIS-1739	土器	甕(胴部)	残9.8	—	—	にぶい黄緑 7.5YR5/4	多量の白色粒子・少量の赤色粒子 と3mm大の小礫	良好	外面横状工具による沈線文
81	TGKIS-1742	土器	楕鉢(胴部下半)	残4.0	—	—	黄 7.5YR7/6	長石・石英・赤色粒子	良好	—
82	TGKIS-1742	土器	楕鉢(胴部下半)	残5.3	—	—	にぶい黄緑 7.5YR5/3	長石・石英・白色粒子	良好	—
83	TGKIS-1740	土器	大鉢類	残5.5	—	—	黄 7.5YR6/6	長石・黒雲母	良好	内外面横方向ナデ／内面指痕／外面 把手あり

番号	注記記号	器種	器形	母高 (cm)	口徑 (cm)	底徑 (cm)	色 調	胎 土	焼成	器形の特徴
84	TGK15-1732	土器	埴か	残4.1	9.0	—	にがい・赤褐色 5YR5/3	長石・石莖・白色粒子	良好	内面ナデ／外面竹串状工具で木の杵を 模した胎文
85	TGK15-1739	土器	埴か	残4.2	—	—	にがい・赤褐色 5YR5/3	長石・石莖・白色粒子	良好	外面竹串状工具で木の杵を模した胎文 ／71と同一器体だが接合せず
86	TGK15-1739	瓦	平瓦	最大長 8.1	最大幅 7.6	最大厚 2.2	にがい・黄褐色 7.5YR5/3	長石・黒雲母・石莖	良好	全面にナデ状の調整痕／一部面取
87	TGK15-1736	陶器	埴	残4.8	(12.2)	—	にがい・黄褐色 7.5YR5/3	白色粒子	良好	輪葉輪ははばら 自然釉か
88	TGK15-1736	陶器	埴	残2.5	—	4.7	黄褐色にがい・黄 7.5YR5/1	金雲母・長石	良好	内外面施釉、貼付高台
89	TGK15-1732	陶器	甕	1.8	—	10.0	外面黄褐色 2.5Y7/4 内面にがい・赤褐色 2.5YR5/4	金雲母・白色粒子	良好	内面ナデ／外面黄褐色施 光沢はに がい
90	TGK15-石組81759	土器	甕か・底の底面	残7.3	—	22.6	黄褐色 2.5Y7/4	長石・白色粒子・石莖・雲母	良好	内外面体部施釉とナデ／外面底部粗 粒砂付着
91	TGK15-イナ55787	土器	大鉢形(底部)	残7.3	—	21.0	にがい・黄褐色 10YR7/4	長石・赤色粒子・石莖	やや良	内外面ナデ／割れ口磨耗／外面底部粗 粒砂付着、磨付
92	TGK15-イナ55787	土器	甕か・底(胴部)	残7.4	—	—	にがい・赤褐色 5YR5/3	白色粒子多量・長石・石莖	良好	内外面ナデ／外面三角形状工具による 押型文あり(66と類似)
93	TGK15-イナ55787	磁器	碗	残3.7	(11.6)	—	灰白 10Y8/1	黒色微粒子	良好	外面染付
94	TGK15-イナ55788	土器	甕か・底(胴部)	残5.6	—	—	にがい・黄褐色 10YR5/4	長石・石莖・白色粒子	良好	内外面ナデ／内面磨損痕あり／外面長 軸1.5cm短軸1.3cmの円形工具による胎文
95	TGK15-マナ578一式	陶質土器	甕(口辺部)	残7.6	(68.0)	—	灰 N5/	粗粒砂(白色粒子)	良好	内外面ナデ
96	TGK15-マナ578一式 他一式	陶質土器	甕(胴部～底部)	残56.1	—	18.0	灰 N5/	粗粒砂(白色粒子)	良好	内外面ナデ／内面明瞭な輪縁痕、下部 に縁が糸状状に付着／土器が全周せず 煮い違いあり
97	TGK15-マナ578一式	石製品	砥石	最大長 6.1	最大幅 2.5	最大厚 1.3	灰白 5Y7/1	—	—	砥石磨製
98	TGK15-1762	土器	甕林(口辺部)	残9.6	(29.4)	—	黄褐色 2.5Y4/2	長石・黒雲母・4mm前後の小礫	良好	内外面ナデ
99	TGK15-1755	土器	広口甕 (口辺部)	残11.2	(28.0)	—	黒 N2/	長石・黒雲母	やや良	内面磨損痕 外面輪状工具による沈線文
100	TGK15-1753	土器	広口甕か (口辺部)	残9.5	—	—	黒 N2/	長石・石莖・雲母	良好	内面磨損痕 外面輪状工具による沈線文 99と同一器体か
101	TGK15-1753	土器	甕林(胴部)	残3.3	—	—	黒 7.5Y2/1	長石・黒雲母	やや良	外面丁寧ナデ
102	TGK15-1753	土器	甕か・底(胴部)	残4.5	—	—	にがい・黄褐色 7.5YR5/4	長石・石莖・白色粒子	良好	縦径・斜径などの沈線文多数あり
103	TGK15-1753	土器	肥平心	最大長 6.0	最大幅 2.2	最大厚 2.0	にがい・黄褐色 10YR5/4	長石・石莖・白色粒子	良好	器部の可能性もあり
104	TGK15-1755	瓦	平瓦	最大長 13.1	最大幅 10.2	最大厚 2.2	7.5YR5/1	金雲母・長石・5mm大の小礫	良好	全面ナデ、特に面に丁寧ナデ調整
105	TGK15-1755	瓦	平瓦	最大長 14.8	最大幅 11.3	最大厚 2.0	灰 5Y5/1	長石・石莖・金雲母	良好	全面ナデ、特に面に丁寧ナデ調整、 割れ目磨耗
106	TGK15-1755	瓦	平瓦	最大長 10.4	最大幅 11.4	最大厚 1.9	灰ナデ／ 5YR5/2	長石・金雲母	良好	全面ナデ、特に面に丁寧ナデ調整
107	TGK15-1755	瓦	平瓦	最大長 14.0	最大幅 8.9	最大厚 1.9	にがい・黄褐色 10YR7/4	金雲母・長石・赤色粒子・石莖・1 cm大の小礫微量	良好	全面ナデ、特に面に丁寧ナデ調整
108	TGK15-1755	瓦	平瓦	最大長 12.9	最大幅 8.2	最大厚 2.0	灰 N4/	長石・赤色粒子・雲母	良好	全面ナデ、特に面に丁寧ナデ調整
109	TGK15-1755	瓦	平瓦	最大長 6.5	最大幅 9.7	最大厚 1.8	2.5Y3/1	長石・石莖・5mm大の小礫	良好	全面ナデ、凸面の調整は面に比べ粗 雑
110	TGK15-1755	瓦	平瓦	最大長 9.9	最大幅 10.5	最大厚 2.0	黄褐色 2.5Y5/2	金雲母・長石・石莖・ 赤色粒子・黒色粒子	良好	全面ナデ、凸面は磨耗工具痕が残る
111	TGK15-1752	陶器	埴	残7.5	(11.6)	(5.0)	黄褐色にがい 2.5Y7/2	金雲母・長石	良好	内外面施釉(灰緑) 貼付高台
112	TGK15-1753	陶器	埴	残4.1	(9.5)	—	灰白 10Y8/1	白色粒子・黒雲母	良好	内外面施釉(灰緑)
113	TGK15-1752	陶器	埴	残3.85	(17.0)	—	黄褐色 2.5Y5/4	白色粒子	良好	内外面施釉(灰緑)か、光沢はにがい
114	TGK15-1752	陶器	埴か	残1.9	—	(2.8)	輪葉部灰白 10Y8/1 黄褐色にがい・黄褐色 10YR7/4	黒色粒子・長石	良好	内外面施釉(灰緑) 貼付高台
115	TGK15-1753	陶器	甕	残1.0	—	6.0	灰 7.5Y4/4	長石	良	内外面付着痕／内外面施釉(灰緑)／外 面底部全切欠
116	TGK15-1752	磁器	筒形碗	残3.9	—	—	灰白 10Y8/1	黒色粒子	良好	内外面染付／肥前系
117	TGK15-近金い	土器	甕か・底の底面	残6.8	—	22.0	にがい・赤褐色 2.5Y5/4	長石・赤色粒子・石莖	やや良	内面ナデ／外面底部凹凸磨れ

第4章 まとめ

今次調査は、1989年に山梨県埋蔵文化財センターが調査を実施した場所とほぼ同じ場所であったため、県の調査成果を補完する成果を得ることができた。順を追って記述する。

甕口辺部の分類 (第38図)

出土遺物は甕破片が大部分を占め、そのうち口辺部は土のう袋61袋分出土した(調査区南52袋/調査区北9袋)。発掘調査時から甕口辺部はいくつかの種類が見られたことから、報告書掲載遺物のうち口辺部17点(調査区南16点/調査区北1点)を分類することとした。しかし、報告書掲載遺物は施文があるものや遺構に伴うものなど、出土遺物の中でも特徴的なものを中心に図化しているため、換言すれば明瞭な特徴を見いだせなかった口辺部は図化していないことになる。そこで、報告書掲載遺物以外の口辺部資料のうち、調査区南の上層・下層から出土した口辺部計17点を無作為に抽出して断面実測を行い、掲載遺物と共に計34点を分類対象とした。ただし、口辺部の報告書掲載遺物は調査区南が主を占めることから、以下の分類も調査区南の出土遺物が主となっていることを断っておく。

口辺部は7種類に分類した。A類としたものは、口辺部断面がT字状を呈しているもので14点ある。そのうち、断面がひらがなの「て」のような屈曲部を持つものをA1類、屈曲部を持たず直線的なものをA2類とした。図中では、A1類は下層からの出土が多い傾向(8点中5点)、A2類は上層からの出土が多い傾向(6点中4点)がみられるが、A類という大枠で捉えた場合、上層下層いずれの層位からも出土する。そのため、本遺跡では最も普遍的なタイプの口辺部といえる。

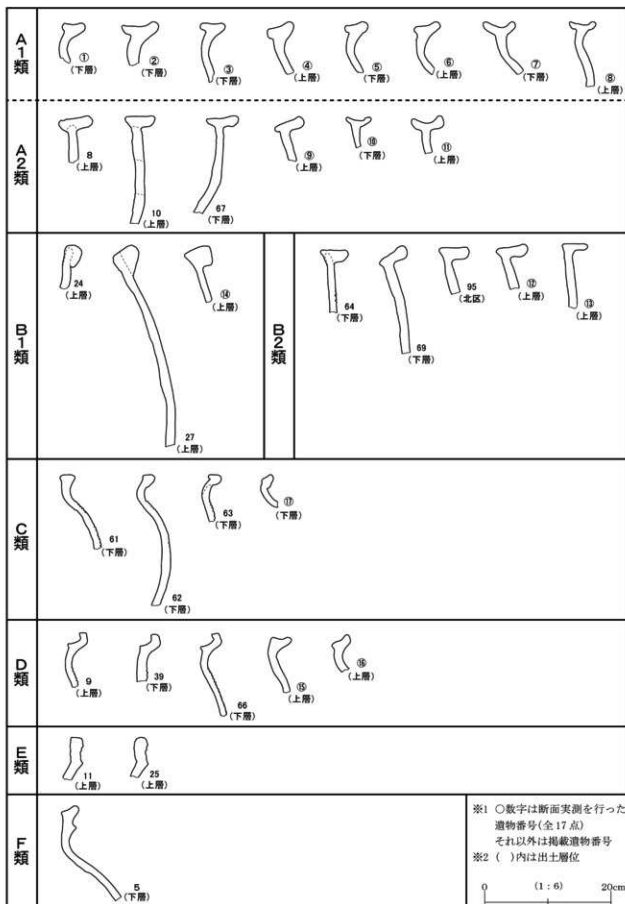
B類は口縁部が外側に伸長し、断面が「」型を呈しているものである。口縁部が肥厚するものをB1類、肥厚しないものをB2類とした。B1類は肥厚の幅によってさらに細かく分類が可能と思われるが、今回は実測資料が少ないためこれ以上の分類は不可能である。B2類はA2類と類似する点もみられるが、内側と外側に伸長する部分の比率によって分類した。「内側の伸長する部分:外側に伸長する部分」が、おおよそ「1:2」の比率に近いものをA2類、そうでないものをB2類とした。図中では、B1類は全点上層から出土し、B2類はいずれの層位からも出土する傾向がみられる。

C類は明瞭な頸部をもち、A類B類ほどの口縁部の特徴がみられないものを分類した。図中の遺物はいずれも下層から出土している。

D類は口縁部にL字を90度左に反転したような形状を持つ口辺で、明瞭にL字を90度反転した形状を持つ61・39・66と、不明瞭な形状を持つ⑬と⑭に分類される。

E類・F類は口辺部の形状が他と異なるため分類を行ったが比較資料が極端に少ないため、出土した口辺部の一例として挙げておく。なお、E類の11・25は別個体として実測を行ったが、報告書作成作業最終段階で接合することが判明したため同一個体である。

掲載した計34点のうちA類及びB類の掲載点数が多いことから、本遺跡の口辺部はおおむねA類、B類を主とした口辺部で構成されていると考えられる。ただし、あくまで限定的な資料で分類したため、「A類・B類を主とした口辺部で構成されている傾向がある」ということを付記しておく。



第38図 出土口辺部分類

第2表 出土口辺部 遺物観察表

区分	番号	出土層位	土器番号	器種	口径 (cm)	焼成	出土場所	注記記号
A1 類	①	下層	97	土器	(34.6)	良好	南区／北の灰原下120cm～	TGKIS-北灰原下120～ロス・底部
	②	下層	97	土器	(61.8)	良好	南区／北の灰原下120cm～	TGKIS-北灰原下120～ロス・底部
	③	下層	97	陶質土器	(40.8)	良好	南区／北の灰原下120cm～	TGKIS-北灰原下120～ロス・底部
	④	上層	59	土器	(60.7)	良好	南区／下30～50cm	——
	⑤	下層	152	土器	(35.0)	良好	南区／石列①下層から下30cm～(地表下100cm～)	——
	⑥	上層	59	土器	(35.0)	良好	南区／下30～50cm	——
	⑦	下層	152	陶質土器	(55.8)	良好	南区／石列①下層から下30cm～(地表下100cm～)	——
	⑧	上層	48	土器	(33.0)	良好	南区／土器集中検出面(下30～40cm)	TGKIS-土器ロス・底部
A2 類	8	上層	—	土器	(45.0)	良好	南区／土器集中	TGKIS-土器け26
	10	上層	—	土器	(36.2)	良好	南区／土器集中検出面	TGKIS-土器け70
	67	下層	68	陶質土器	(42.4)	良好	南区／下50～70cm	TGKIS-P2
	⑨	上層	48	土器	(64.4)	良好	南区／土器集中検出面(下30～40cm)	TGKIS-土器ロス・底部
	⑩	下層	152	土器	(35.2)	良好	南区／石列①下層から下30cm～(地表下100cm～)	——
	⑪	上層	59	陶質土器	(74.8)	良好	南区／下30～50cm	——
B1 類	24	上層	—	土器	(29.0)	良好	南区	TGKIS-け116
	27	上層	56	土器	(74.4)	良好	南区／下20cm	TGKIS-P1
	⑫	上層	59	土器	(47.8)	やや良	南区／下30～50cm	——
B2 類	64	下層	—	土器	(28.8)	良好	南区／下50～70cm	TGKIS-け35
	69	下層	70	土器	(63.8)	良好	南区／下50～70cm	TGKIS-P4
	95	北区	—	陶質土器	(48.0)	良好	北区／埋設土器	TGKIN-マイセブナー一式
	⑬	上層	48	土器	(58.5)	良好	南区／土器集中検出面(下30～40cm)	TGKIS-土器ロス・底部
	⑭	上層	48	土器	(44.0)	良好	南区／土器集中検出面(下30～40cm)	TGKIS-土器ロス・底部
	61	下層	—	陶質土器	(26.0)	良好	南区／下100～110cm	TGKIS-け44-2
	62	下層	—	土器	(32.0)	良好	南区／サブレ下100～110cm	TGKIS-け50／TGKIS-け45
C 類	63	下層	—	陶質土器	(27.0)	良好	南区／サブレ下110～110cm	TGKIS-け50
	⑮	下層	152	土器	(26.0)	やや良	南区／石列①下層から下30cm～(地表下100cm～)	——
D 類	9	上層	—	土器	(47.0)	良好	南区／土器集中	TGKIS-土器け26
	39	下層	—	土器	(41.4)	やや良	南区／4号石組	TGKIS-石組4号54-1
	66	下層	—	土器	(42.4)	やや良	南区／下100～110cm(21号東壁付近から出土)	TGKIS-け44-2
	⑯	上層	48	陶質土器	(38.4)	良好	南区／土器集中検出面(下30～40cm)	TGKIS-土器ロス・底部
	⑰	上層	59	陶質土器	(37.8)	不良	南区／下30～50cm	——
E 類	11	上層	—	土器	(34.0)	良好	南区／土器集中	TGKIS-土器け26
F 類	25	上層	—	土器	(26.6)	良好	南区／下20～50cm	TGKIS-け18
	5	下層	—	陶質土器	(69.0)	良好	南区／石列①下層から下30cm	TGKIS-石列け84

土地利用について

生産遺跡である以上、江戸時代の人々の作業場の痕跡もあると思われるが、今次調査では見つけることができなかった。しかし、窯本体と思われる小丘の北側には平坦な場所が広がっていること、この平場の西側のみ等高線の間隔が狭くなり崖状の地形を呈していることから、窯の操業にあたり作業場をつくるため、西

から東へ傾斜する流れ山の地形を一部改変した可能性も十分考えられる（第5図及び写真図版写真参照）。想像をたくましくすると、以下のようなことが考えられる。まず、作業場をつくるために流れ山の東斜面を掘削し平地を造成する。掘削した土を、窯を形成するための土として利用し、現況地形にみられるような小丘と平坦地が造られたと想定した。

また、西から東へ傾斜する以外にも、調査区内は北から南へと浅い谷状地形をしていることが土層堆積状況から明らかになっており、窯本体は浅い谷状地形の底付近に位置している。それは、窯本体付近の灰原は調査区内で最も厚い堆積となっていることから明らかである。しかし、焼成不良品などを浅い谷地形に捨ててを前提に底付近に窯本体を設置したのか、焼成の都合なのかは不明である。いずれにせよ、北から南にゆるやかに傾斜する浅い谷地形に不良品を廃棄して灰原が形成され、調査区に隣接する南側の土地との高低差が1m程度あるという土地が、生産活動によって生成されたと考えられる。なお、調査区以南の現況地形は流れ山の地形をほとんど改変していないのか、調査区のような高まりは確認できず、おおむね頂上から裾部にむかってゆるやかに傾斜する地形である（第4図参照）。

灰原の時期差について（第39図）

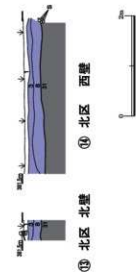
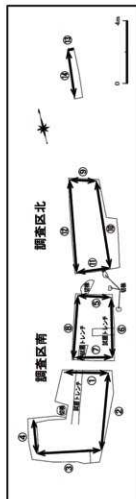
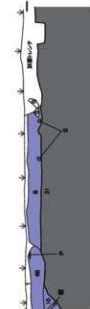
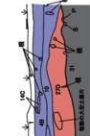
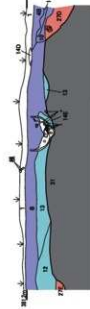
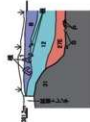
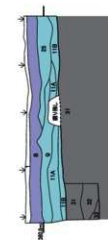
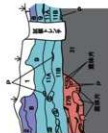
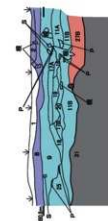
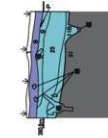
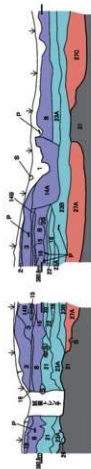
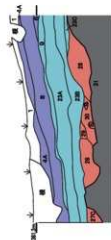
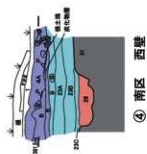
今次調査区全体が灰原であるため、地山以外の全層位から遺物が出土した。しかし、層位によって遺物や窯体片の出土量に差異があること、『甲斐国志』及び「妙善寺文書」の記録から窯の操業年数が最低でも14年間はあることから、灰原にも時期差があると想定した。

まず、遺物が全く出土しなくなる31層（暗褐色土）を操業時の地表面（地山・第39図の灰色部分）と判断した。その後、生産活動によって1号～6号落込に失敗品が投棄され落込が埋まる。そこで、これらの落込を第1期灰原と仮定する（第39図の赤色部分）。ただ、上記落込は急激に落ち込む様相が見られることから、31層を人為的に掘削し、不良品を廃棄した可能性も考えられる。

その後も生産は続き、第1期灰原の上層に新たな灰原が形成される。調査区南では9層（焼土塊・土器・窯体片層）、21層（円礫・角礫・焼土塊・土器層）、22層（にぶい黄褐色土）、23A層（暗赤褐色土）を上層に堆積し、調査区北では12層（褐色土）、13層（土器・焼土塊・礫を含む黒褐色土層）が堆積する。これらの層位を第2期灰原と仮定した（第39図の水色部分）。その理由として、調査区南の「②南区 東壁」のセクション図中に存在する1号土坑の覆土である14A層（粘土層）の検出位置があげられる。1号土坑は第2期灰原と仮定した23A層及び23B層（暗赤褐色土）を掘り込んで作られているため、これらの層とは多少の時期差があると考えた。また、9層や23A層など上述の層が標高380.8m付近に展開し、多量の土器片や焼土塊、窯体片が調査区南で平面的に出土したことも、これらの層を第2期灰原と仮定した理由である。

第3期（最終）灰原は、現況表土に近い部分である（第39図の紫色部分）。石列が9層直上に設けられ、8層（土器、角礫を含む暗赤褐色土）などが堆積。8層がある程度堆積した段階で1号土坑が掘られている。また、「①南区 北壁」から「②南区 東壁」にみられる焼土塊を含む2層（褐色土）、3層（褐色土）を主とする盛り上がった部分は、窯から焼土塊などを搬出した痕跡であろう。窯本体と想定される小丘の東面、南面にこのような部分がいくつかみられたが、窯から近い場所に投棄したままの様子を呈していると思われる。他の層位でこのような盛り上がった部分は見られず、むしろ層位がほぼ傾斜に対して平行に近い様子を呈していることを考えると、操業時は灰原を整地しながら生産活動を行っていた可能性も十分考えられる。つまり、2層・3層は廃業当時の地表面に近い。

以上、灰原の時期差について考察を加えたが、調査区北にはこの理論が当てはまらない部分もある。調査区は北から南へと浅い谷を形成しており、調査区の南北で31層の検出深度が異なることは先に述べたとおりである。谷の深い部分に失敗品を多く投棄し、浅い部分にはあまり投棄しなかったとも考えられるが、灰原の時期差については検討課題を残すこととなった。



第39図 灰原の時期差想定図

なお、現況の農道法面に土器片などが露頭している理由は、第1期から第3期灰原が堆積したのちに、農道建設のために掘削されたことで灰原が露頭したためである。

その他

調査区南の調査では、多量の土器片とともにわずかながら竹の炭化物や、竹と思われる部材の痕跡を持つ窯体片が出土した。本遺跡の窯本体の形状を考える上でヒントになると思われるが、紙面がついてしまったため写真での報告のみとする。

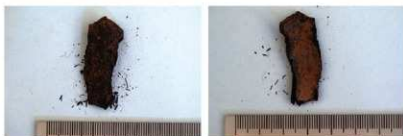


写真7・8 竹の炭化物 調査区南から出土



写真9・10 窯体片 調査区南上層から出土

まとめ

以上、今次調査成果をまとめた。近世の生産遺跡の調査は県内でもほとんど事例がないため、多少なりとも貴重な調査成果を報告することができたと感じている。ただし課題も多い。出土遺物量に対して掲載遺物が少ない、本遺跡で生産された製品の流通（使用）範囲、同時代遺物との比較、妙善寺文書の実見など、今後も検討が必要である。なお、流通範囲に関しては甲府城下町遺跡の調査を数多く手掛けている山梨文化財研究所の望月秀和氏、昭和測量株式会社の泉 英樹氏・高野 高潔氏にもご意見を伺ったが、「甲府城下町遺跡では見たことがないタイプである」というご意見を頂戴している。また、妙善寺文書中には「瓶焼運上」とあるため税として裏を納入したことから、近隣には流通していない可能性も考えられる。

末筆ながら、調査を滞りなく完遂するためにご尽力いただいた山梨県中北農務事務所、調査区の元土地所有者の小林 正史氏、作業員駐車場として農地をお貸しいただいた猪股 庄太郎氏に感謝申し上げます。

【主要参考文献】

双葉町『双葉町誌』1977

山梨県教育委員会『山梨県生産遺跡分布調査報告書（窯業遺跡）』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第51集 1990

同上『甲府城下町遺跡』同上第215集 2004

保坂吾良吉『双葉町百話集』2004（自費出版）

山梨県埋蔵文化財センター「双葉町笠石発掘調査報告」2003

甲府市教育委員会『甲府城下町遺跡Ⅵ』甲府市文化財調査報告57 2012

同上『甲府城下町遺跡ⅩⅥ』同上79 2015

同上『甲府城下町遺跡29（山梨県甲府市中央5丁目2～4区）』同上126 2022

小川 望編『考古調査ハンドブック 19 江戸の土器』ニューサイエンス社 2019